
日本ロシア文学会
第 68 回大会資料集

2018 年 10 月 27 (土) ~28 日 (日)
名古屋外国語大学

日本ロシア文学会

第 68 回 (2018 年度) 定例総会・研究発表会は、来たる 10 月 27 日 (土)、28 日 (日) の両日、名古屋外国語大学にて開催されます。研究発表会では、26 件の個別発表 (A, B, C)、2 件の企画パネル (P)、1 件の国際シンポジウム (S)、併せて全 13 ブロックが設けられます。ふるってご参加ください。

以下の日程をご確認の上、事務局・大会実行委員会からの問合せメールに対し、10 月 17 日 (水) までに参加予定をご返信くださるようお願いいたします (返信先: exe_conf@yaar.jpn.org)。

10 月 27 日 (土)							
開会式 09:45-09:55 5 号館 1 階 511 教室							
		第 1 会場 5 号館 1 階 511 教室		第 2 会場 5 号館 2 階 521 教室		第 3 会場 5 号館 2 階 522 教室	
研究発表	10:00-10:35	S01	ブロック①	B01	ブロック②	C01	ブロック③
	10:35-11:10			B02		C02	
	11:10-11:15	休憩					
	11:15-11:50	S01	ブロック①	B03	ブロック④	C03	ブロック⑤
	11:50-12:25			B04		C04	
	12:25-13:00			B05		C05	
昼食・理事会	13:00-14:00	理事会 5 号館 2 階 322 教室					
研究発表	14:00-14:35	A01	ブロック⑥	B06	ブロック⑦	C06	ブロック⑧
	14:35-15:10	A02		B07		C07	
ティーブレイク	15:10-15:20						
大賞受賞 記念講演	15:20-16:20	5 号館 1 階 511 教室					
定例総会	16:30-17:40	5 号館 1 階 511 教室					
懇親会	18:00-20:00	7 号館 1 階 食堂					

10 月 28 日 (日)							
		第 1 会場 5 号館 1 階 511 教室		第 2 会場 5 号館 2 階 521 教室		第 3 会場 5 号館 2 階 522 教室	
研究発表	09:30-10:05	A03	ブロック⑨	P01	ブロック⑩	C08	ブロック⑪
	10:05-10:40	A04				C09	
	10:40-10:45	休憩					
	10:45-11:20	A05	ブロック⑫	P01	ブロック⑩	P02	ブロック⑬
	11:20-11:55	A06					
	11:55-12:30	A07					
昼食・ 各種委員会	12:30-13:30	広報委員会 (322 教室)、事務局 (522 教室)					

会場案内

- 〈受付〉 5 号館 1 階 ホワイトエ
- 〈控室〉 5 号館 2 階 321 教室
- 〈書籍等販売〉 5 号館 1 階 ホワイトエ

プレシンポジウム

カタストロフィの想像力とロシア文化

10月26日(金)16時40分～

5号館1階511番教室

・記念講演

平野啓一郎「カタストロフィと小説」

・シンポジウム

亀山郁夫「危機の想像力とドストエフスキー」

中澤敦夫「中世ロシアにおける終末の想像力」

乗松亨平「ナショナル・アイデンティティとしてのカタストロフィ？」

・司会 亀山郁夫

《趣旨》

二極化、独裁、ネオナショナリズム、「ポスト真実」、反知性主義など、グローバリゼーションの進展のなかで世界は今さまざまな危機に瀕している。地球温暖化による環境破壊、異常気象が私たちの生活を直撃し、不吉な予感を掻き立てている。他方、AI、ビッグデータによって人間の存在様式そのものも著しい変容を遂げ、ポストヒューマンの思想も台頭しつつある。そうした状況のなかで、人文学は、文学は、小説は、何ができるのか。ロシア文化の立ち位置とはどのようなものか。わが国を代表する中堅作家平野啓一郎氏の講演を軸に、ロシア文学・文化の研究者が熱く語る。

亀山郁夫 (名古屋外国語大学長)「20世紀以降の世界においてドストエフスキー文学がはらむ現代性を《カタストロフィ》をキー概念として考察することの意味を説明し、今後のドストエフスキー研究の可能性について提言を行いたい。キー概念は、《災厄》《終末》《危機》《悲劇》の4つ。実例として、『罪と罰』のエピソードで描かれるラスコーリニコフの「絨毛虫」の夢や、ヴォルテール『キャンディード』が『カラマーゾフの兄弟』の執筆に与えた影響を挙げる」

中澤敦夫 (富山大学教授)「キリスト教の本源にかかわる「終末」の問題は、正教をよりどころに思索してきた中世ロシアの知識人たちにとっても主要な主題の一つだった。とりわけ、キリスト教受容の初期、創世6000年紀末、教会分裂期などの危機の時代には、「終末」が広く知識人をとらえ、かれらは歴史や生のあり方について強い現実感をもって思索を繰り広げた。パネルでは、ロシア中世の終末思想の特質について検討しながら、その現代における系譜についても考えてみたい」

乗松亨平 (東京大学准教授)「ロシアはその歴史上、外国の侵攻や革命などのカタストロフィにくりかえし見舞われてきた。ユーリー・ロトマンはそれを「爆発」と呼び、「爆発」によりすべてが反転する二極的構造としてロシア史を特徴づけた。ただ、このような見方はロシアに限定されるものではない。美術批評家の榎木野衣は『震美術論』で、定期的なカタストロフィ＝地震による破壊が日本文化を特徴づけると論じた。カタストロフィをナショナルな特徴とみなすこれらの論について、そのゆえんと意味を考えたい」

共催 日本ロシア文学会・名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター

協力 日本ドストエフスキー協会

第 1 日研究発表 10 月 27 日 (土)

第 1 会場 5 号館 1 階 511 教室				
ブロック・日時	番号	発表者	題 目	司会者
ブロック① 10 月 27 日 10:00-13:00	S01	Л. Н. Толстой между Востоком и Западом: исследования, адаптации, перспективы СКВОРЦОВ А. Э., ХАСЭГАВА Акира, МУХАМЕТШИНА Р. Ф., НАСРУТДИНОВА Л. Х., ЯГИ Наото		КАКУБАРИ Сильвия, ТАКАХАСИ Томоюки
	A01	古宮路子 КОМИЯ Митико	ファクトの文学と 1920 年代ソ連のハイパーリアル Литература факта и гиперреальность русской литературы в 1920-х гг.	
ブロック⑥ 10 月 27 日 14:00-15:10	A02	占部歩 УРАБЭ Аюму	ヴィクトル・ペレーヴィンの小説における自己形成としてのアイデンティティの問題 Проблема идентичности как образ самоформирования в романах Виктора Пелевина	岩本和久 中村唯史
	第 2 会場 5 号館 2 階 521 教室			
ブロック・日時	番号	発表者	題 目	司会者
ブロック② 10 月 27 日 10:00-11:10	V01	東出朋 ХИГАСИДЭ トモ	«Можно»の助詞用法—コーパスを用いた統語的分析 «Можно» как вопросительная частица: синтаксические особенности (по данным НКРЯ)	秋山真一 古賀義顕
	V02	福安佳子 ФУКУЯСУ Ёсико	Тоска と Хандра その日本語訳について О тоске и хандре: проблемы перевода на японский язык	
ブロック④ 10 月 27 日 11:15-13:00	V03	ОКАНО Канаメ	Глаголы затрудненного перемещения в русинском языке Воеводины	三浦清美 三谷恵子
	V04	恩田義徳 ONDA Yoshinori	古代ロシア語文献におけるハザールについて Khazar in the Old Russian text	
	V05	ДАЦЕНКО Игорь	Акцентуация форм глагола <i>умрети</i> в Острожской Библии 1581 года	
ブロック⑦ 10 月 27 日 14:00-15:10	V06	БЛИНОВ Евгений Николаевич	Язык и революция: три подхода к языковой политике в раннесоветский период (20е – 30е годы)	黒岩幸子 佐山豪太
	V07	ЛАСКАРЕВА Елена Ромуальдовна	Лингвистические основы и минимизация материала при ускоренном изучении русского языка	
第 3 会場 5 号館 2 階 522 教室				
ブロック・日時	番号	発表者	題 目	司会者
ブロック③ 10 月 27 日 10:00-11:10	C01	三浦領哉 МИУРА Рэя	В. Ф. Одо-Ефускийの音楽思想—『ロシアの夜』と以後への展開 Мысль о музыке В. Ф. Одоевского в произведении «Русские ночи» и ее дальнейшее развитие	大嶋かず路 高橋健一郎
	C02	一柳富美子 ХИТОЦУЯНАГИ Фумико	再考：国民学派とポスト国民学派 Пересмотр: Русская национальная композиторская школа и ее продолжение	

ブロック⑤ 10月27日 11:15-13:00	C03	呉佳静 У Цзя-Цин	Визуальная поэтика советской повседневности в кинотекстах Марлена Хуциева	扇千恵 佐藤千登勢
	C04	梶山祐治 КАДЗИЯМА Юдзи	キラ・ムラトワの編集と物語の関係 Взаимоотношение монтажа и повествования в фильмах К. Г. Муратовой	
	C05	本田晃子 ХОНДА Акико	不条理空間としての地下鉄—アンドレイ・イ監督『パイロットたちの科学捜査課』における地下鉄表象分析 Метро как пространство абсурда: анализ изображения пространства метро в фильме «Научная секция пилотов» Андрея И	
ブロック⑧ 10月27日 14:00-15:10	C06	熊野谷葉子 КУМАНОЯ- НАКАГАВА Ёко	アルハンゲリスク州の笑話「コルニーロヴォの話」のテキストと語りにおけるフォークロアの諸要素 Фольклорные элементы в тексте и повествовании юмористического рассказа «Корниловская быль» в Архангельской области	伊東一郎 中澤敦夫
	C07	塚田力 ЦУКАДА Цутому	ウクライナ古儀式派とチェルノブイリ原子力発電所事故 Украинские старообрядцы и авария на Чернобыльской АЭС	

第 5 回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月27日(土) 15:20-16:20 5号館1階511教室

受賞講演者	講演題目
澤田和彦 САВАДА Кадзухико	アカデミー版『ゴンチャロフ全集』編集入門譚 О составлении примечаний к «Фрегату "Паллада"» в академическом «Полном собрании сочинений И. А. Гончарова в двадцати томах»

第 2 日研究発表 10月28日(日)

第 1 会場 5号館1階511教室

ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック⑨ 10月28日 09:30-10:40	A03	熊宗慧 СЮН Цзун-Хуэй	Визуальные описания в поэме «Реквием» А. Ахматовой	グレチコ・ ヴァレリー 楯岡求美
	A04	鄺定嘉 ЯНЬ Дин-Цзя	Культурно-семиотический подход к пьесе С. М. Третьякова «Рычи, Китай!»	
ブロック⑫ 10月28日 10:45-12:30	A05	樋口稲子 ХИГУТИ Инэко	ドストエフスキーの長編『カラマゾフの兄弟』の構成におけるパーヴェル・スメルジャコフの意味的内容 О смысловой нагрузке образа Павла Смердякова в композиции романа Достоевского «Братья Карамазовы»	郡信哉 松本賢信
	A06	泊野竜一 ТОМАРИНО Рёичи	ドストエフスキーの《大審問官》とオドエフスキーの《ベーターベン晩年のカルテット》における対話表現の比較研究 Сравнительное исследование выражения диалога между «Великим инквизитором» Ф. М. Достоевского и «Последним квартетом Бетховена» В. Ф. Одоевского	
	A07	大野斉子 ОНО Токико	ゴーゴリ作品におけるウクライナの表象：失われた過去とノスタルジー Представление Украины в произведениях Гоголя: потерянное прошлое и ностальгия	

第 2 会場 5 号館 2 階 521 教室				
ブロック・日時	番号	発表者	題 目	司会者
ブロック⑩ 10 月 28 日 09:30-12:30	P01		ロシア語の名詞句をめぐって 匹田剛、後藤雄介、光井明日香、宮内拓也	阿出川修嘉
第 3 会場 5 号館 2 階 522 教室				
ブロック・日時	番号	発表者	題 目	司会者
ブロック⑪ 10 月 28 日 09:30-10:40	C08	大武由紀子 ОТАКЭ Юкико	アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィスー生産主義 理論とその具象 Художник авангарда Густав Клуцис — теория производственничества и ее отображение	河村彩 鈴木佑也
	C09	生熊源一 ИКУМА Генъити	ソ連非公式芸術における写真—ボリス・ミハイロフとコンセ プチュアリズム Влияние фотографии на формирование советского неофициального искусства: Борис Михайлов и Московский концептуализм	
ブロック⑬ 10 月 28 日 10:45-12:30	P02		プラトーフ研究の現在：日本の視座から 古川哲、長井淳、奈倉有里、佐藤貴之、野中進	八木君人

会場校からのお知らせ

【大会実行委員会へのお問合せ】

諫早勇一研究室：電話 0561-75-2081

大会実行委員会：メール exe_conf@yaar.jpn.org

【宿泊・昼食その他】

大学付近には適当なホテルはありません。栄付近もしくは名古屋駅付近にはさまざまなホテルがありますので、そちらの予約をお奨めします。

27 日、28 日には 5 号館 1 階のコンビニが開店しています。軽食、飲み物のほか、ランチボックス (500 円) の販売も予定されています。開店時間は以下のとおりです。

27 日 (土) : 10 : 00 ~ 15 : 00

28 日 (日) : 10 : 00 ~ 13 : 00

大学の近くにはレストランはありませんが、10 分程度歩けばいくつかのレストランがあります。

【会場校までの交通機関等】

名古屋駅 (あるいは栄駅) から市営地下鉄東山線に乗って上社 (乗車時間約 25 分) で下車し、スクールバスに乗るのがいちばんわかりやすい経路です。スクールバスは上社駅のバスターミナル 1 番乗り場から出ています (乗車時間約 15 分)。当日は運転手に日本ロシア文学会出席と言えば、無料で利用できます。

時刻表は http://www.nufs.ac.jp/media/info_bus01_20180223.pdf を参照してください。土曜日は 8 時から 11 時まで 10 分おきに出ていて、その後もおよそ 20 分おきに出ています。日曜日は臨時バスが運行されます。

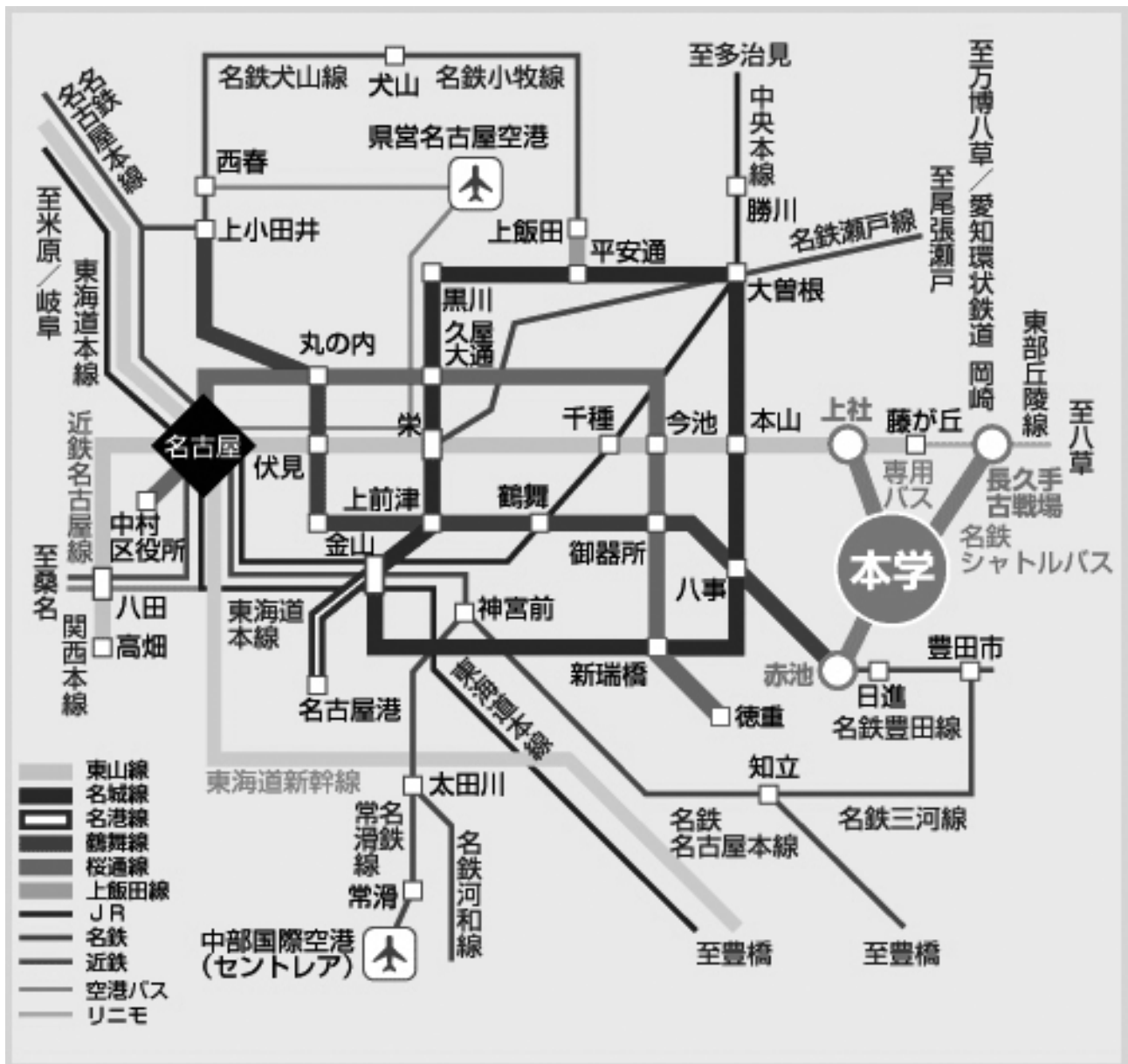
行き : 08 : 30、09 : 00、09 : 30、10 : 00 の 4 本

帰り : 11 : 00、12 : 00、13 : 00、14 : 00 の 4 本

なおこのほか金曜日、土曜日は市営地下鉄鶴舞線の赤池からもスクールバスが出ています。

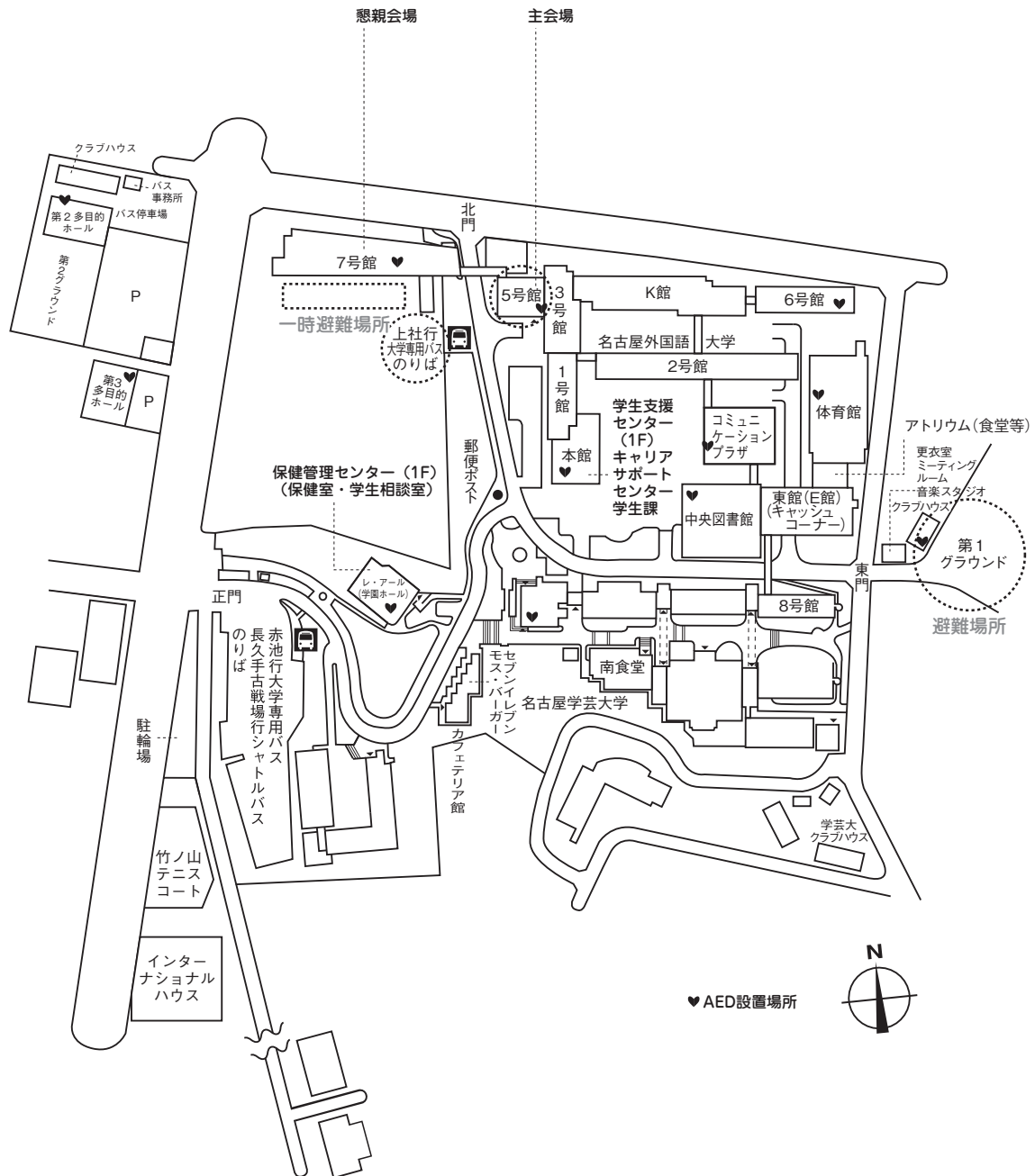
土曜日、日曜日には駐車場の利用も可能です。

【アクセスマップ】



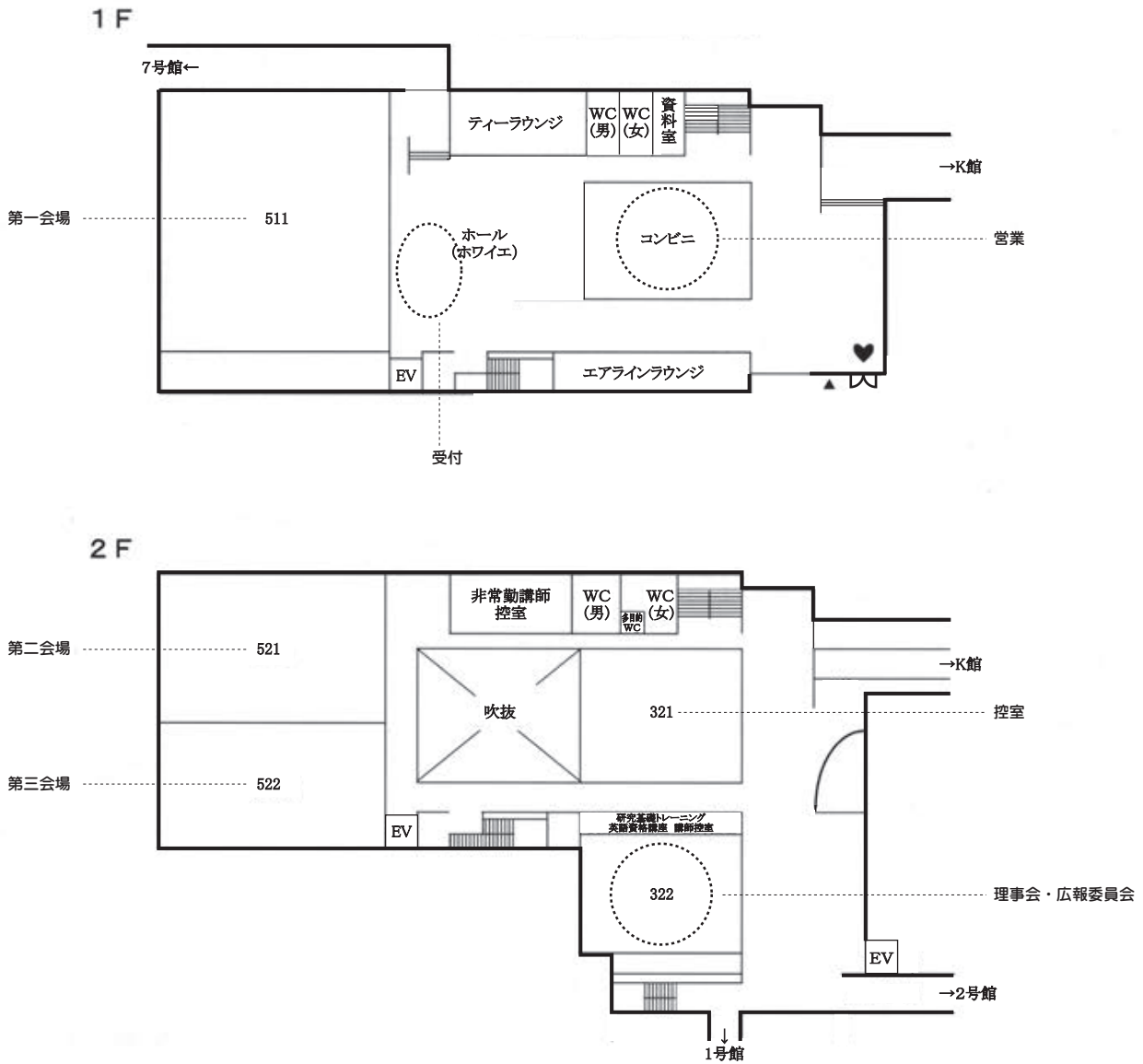
【名古屋外国語大学構内図】

主会場は大学専用バスのりば付近の5号館、懇親会場はその左手の7号館です。



【会場平面図】

会場は5号館の1階と2階で、控室も2階にあります。受付は1階のホワイエです。



【会場説明】

- 〈受付〉5号館1階 ホワイエ
〈控室〉5号館2階 321教室
〈書籍等販売〉5号館1階 ホワイエ
〈発表会場〉 第1会場(511教室) : 開会式、ブロック①、⑥、⑨、⑫
 第2会場(521教室) : ブロック②、④、⑦、⑩
 第3会場(522教室) : ブロック③、⑤、⑧、⑪、⑬
〈大賞受賞記念講演〉 5号館1階 511教室
〈定例総会〉 5号館1階 511教室
〈理事会〉 5号館2階 322教室

懇親会のお知らせ(Банкет)

日時: 10月27日(土)18:00-20:00 (27 октября, сб., 18:00-20:00)

場所: 7号館1階食堂 (Корпус №7, 1 этаж, столовая)

常勤講師: 6,000円(для штатных преподавателей-членов ЯАР – 6,000 иен)

非常勤講師: 4,000円(для внештатных преподавателей-членов ЯАР – 4,000 иен)

大学院生: 3,000円(для аспирантов-членов ЯАР – 3,000 иен)

国外参加非会員: 5,000円・参加費込み(для зарубежных участников конференции-не членов ЯАР – 5,000 иен включая регистрационный взнос)

支払い: 当日受付にて(Способ оплаты: на стойке регистрации, наличный расчет)

☆ご出欠のお知らせを10月17日(水)までにお願ひします(exe_conf@yaar.jp.org)。

日本ロシア文学会第 68 回研究発表会 報告要旨集

-
- A01 古宮路子 ファクトの文学と 1920 年代ソ連のハイパーリアル
- A02 占部歩 ヴィクトル・ペレーヴィンの小説における自己形成としてのアイデンティティの問題
- A03 熊宗慧 Визуальные описания в поэме «Реквием» А. Ахматовой
- A04 鄒定嘉 Культурно-семиотический подход к пьесе С.М. Третьякова «Рычи, Китай!»
- A05 樋口稲子 ドストエフスキーの長編『カラマゾフの兄弟』の構成におけるパーヴェル・スメルジャコフの意味的内容
- A06 泊野竜一 ドストエフスキーの《大審問官》とオドエフスキーの《ベートーベン晩年のカルテット》における対話表現の比較研究
- A07 大野斉子 ゴーゴリ作品におけるウクライナの表象：失われた過去とノスタルジー
- B01 東出朋 «Можно»の助詞用法—コーパスを用いた統語的分析
- B02 福安佳子 Тоска と Хандра その日本語訳について
- B03 OKANO かなめ Глаголы затрудненного перемещения в русинском языке Воеводины
- B04 恩田義徳 古代ロシア語文献におけるハザールについて
- B05 ダツェンコ イーホル
オストログ聖書（1581）における умрети 形のアクセント法について
- B06 БЛИНОВ Евгений
Язык и революция: три подхода к языковой политике в раннесоветский период (20e – 30e годы)
- B07 ЛАСКАРЕВА Елена
Лингвистические основы и минимизация материала при ускоренном изучении русского языка
- C01 三浦領哉 В. Ф. Одоэвфскийの音楽思想—『ロシアの夜』と以後への展開
- C02 一柳富美子 再考：国民学派とポスト国民学派
- C03 吳佳靜 Визуальная поэтика советской повседневности в кинотекстах Марлена Хуциева
- C04 梶山祐治 キラ・ムラトワの編集と物語の関係
- C05 本田晃子 不条理空間としての地下鉄—アンドレイ・イ監督『パイロットたちの科学捜査課』における地下鉄表象分析
- C06 熊野谷葉子 アルハンゲリスク州の笑話「コルニーロヴォの話」のテキストと語りにおけるフォークロアの諸要素
- C07 塚田力 ウクライナ古儀式派とチェルノブイリ原子力発電所事故
- C08 大武由紀子 アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス—生産主義理論とその具象
- C09 生熊源一 ソ連非公式芸術における写真—ボリス・ミハイロフとコンセプチュアリズム
- P01 ロシア語の名詞句をめぐって（匹田剛、後藤雄介、光井明日香、宮内拓也、阿出川修嘉）
- P02 プラトノフ研究の現在：日本の視座から（古川哲、長井淳、奈倉有里、佐藤貴之、野中進、八木君人）
- S01 Л. Н. Толстой между Востоком и Западом: исследования, адаптации, перспективы (СКВОРЦОВ А. Э., ХАСЭГАВА Акира, МУХАМЕТШИНА Р. Ф., НАСРУТДИНОВА Л. Х., ЯГИ Наото, КАКУБАРИ Сильвия, ТАКАХАСИ Томоюки)
-

日本ロシア文学会

2018 年 10 月

Abstracts of Research Papers Accepted for the 68th Annual Assembly of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

-
- | | | |
|------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| A01 | КОМИЯ Митико | Литература факта и гиперреальность русской литературы в 1920-х гг. |
| A02 | УРАБЭ Аюму | Проблема идентичности как образ самоформирования в романах Виктора Пелевина |
| A03 | СЮН Цзун-Хуэй | The Visual Description in the Poem <i>Requiem</i> by A. Akhmatova |
| A04 | ЯНЬ Дин-Цзя | A Cultural Semiotic Approach to Sergei Tretyakov's " <i>Roar, China!</i> " |
| A05 | ХИГУТИ Инэко | О смысловой нагрузке образа Павла Смердякова в композиции романа Достоевского «Братья Карамазовы» |
| A06 | ТОМАРИНО Рёичи | Сравнительное исследование выражения диалога между «Великим инквизитором» Ф. М. Достоевского и «Последним квартетом Бетховена» В. Ф. Одоевского |
| A07 | ОНО Токико | Представление Украины в произведениях Гоголя: потерянное прошлое и ностальгия |
| B01 | ХИГАСИДЭ Томо | «Можно» как вопросительная частица: синтаксические особенности (по данным НКРЯ) |
| B02 | ФУКУЯСУ Ёсико | О тоске и хандре: проблемы перевода на японский язык |
| B03 | OKANO Kaname | Verbs of Impeded Motion in Vojvodina Ruthenian |
| B04 | ONDA Yoshinori | Khazar in the Old Russian text |
| B05 | ДАЦЕНКО Игорь | Акцентуация форм глагола <i>умрети</i> в Острожской Библии 1581 года |
| B06 | BLINOV Evgeny | Language and Revolution: three Approaches to Language Policy in the early Soviet Period (20-s – 30-s) |
| B07 | LASKAREVA Elena | Linguistic bases and minimization of material at the accelerated studying of Russian |
| C01 | МИУРА Рэия | Мысль о музыке В. Ф. Одоевского в произведении «Русские ночи» и ее дальнейшее развитие |
| C02 | ХИТОЦУЯНАГИ Фумико | Пересмотр: Русская национальная композиторская школа и ее продолжение |
| C03 | У Цзя-Цин | Visual Poetics of Soviet Everyday Life in Marlen Khutsiev's Film Texts |
| C04 | КАДЗИЯМА Юдзи | Взаимоотношение монтажа и повествования в фильмах К. Г. Муратовой |
| C05 | ХОНДА Акико | Метро как пространство абсурда: анализ изображения пространства метро в фильме «Научная секция пилотов» Андрея И |
| C06 | КУМАНОЯ-НАКАГАВА Ёко | Фольклорные элементы в тексте и повествовании юмористического рассказа «Корниловская быль» в Архангельской области |
| C07 | ЦУКАДА Цутому | Украинские старообрядцы и авария на Чернобыльской АЭС |
| C08 | ОТАКЭ Юкико | Художник авангарда Густав Клуцис — теория производственничества и ее отображение |
| C09 | IKUMA Genichi | Влияние фотографии на формирование советского неофициального искусства: Борис Михайлов и Московский концептуализм |
| P01 | Some remarks on nominal phrases in Russian
(HIKITA Go, GOTO Yusuke, MITSUI Asuka, MIYAUCHI Takuya, ADEGAWA Nobuyoshi) | |
| P02 | Studies of Andrei Platonov in Japan
(FURUKAWA Akira, NAGAI Jun, NAGURA Yuri, SATO Takayuki, NONAKA Susumu, YAGI Naoto) | |
| S01 | Л. Н. Толстой между Востоком и Западом: исследования, адаптации, перспективы (СКВОРЦОВ А. Э., ХАСЭГАВА Акира, МУХАМЕТШИНА Р. Ф., НАСРУТДИНОВА Л. Х., ЯГИ Наото, КАКУБАРИ Сильвия, ТАКАХАСИ Томоюки) | |
-

JASRL

October 2018

以下の研究報告要旨は著者に無断で
引用できない。
Not for quotation without the author's
agreement.

【A01】ファクトの文学と 1920 年代ソ連のハイパーリアル

古宮 路子

本発表は、レフグループが 1920 年代に提唱した文学理論であるファクトの文学の「反古典」や「脱物語性」といった特色を、同時代のソ連文学を巡るハイパーリアルな状況に対する応答として説明しようとするものである。

レフが活躍した 1920 年代のソ連文学界では、既存の作品の焼き直しが多く行き渡っていた。特に、19 世紀の古典作品への回帰はそうした傾向を端的に表しており、雑誌『赤い処女地』編集者のヴォロンスキーが指導する「峠」派や、プロレタリア作家組織は、トルストイをはじめとする古典作家に学ぶことを説いていた。しかし、レフはこうした風潮に真っ向から異を唱え、ファクトの文学の基本的性格にも「反古典」を盛り込んで、雑誌『新レフ』で復古主義と闘っていた。

こうしたレフの「反古典」は、同人らのマルクス主義芸術観によって説明されるのが定説だが、のみならず、アヴァンギャルドの言語芸術の本来の性格にも関わっている。『新レフ』誌上では、同時代の作家の描写が、実物を見て描いているのではなく既存の文学的イメージのより合わせになっていることや、どんな新作映画を見ても観客が既存のパターンの繰り返しとして知覚するようになっている現状が批判されている。つまり、レフ同人らは、シミュレーションが現実に置き換わっているハイパーリアルな状況を問題視し、リアルを取り戻そうとしていたのである。

そのためにファクトの文学で取られた方法の一つが「脱物語性」であった。これは、作品からシュジェートやファーブラを排しようとする主張で、レフの議論においては、まず映画に始まり、のちに文学へ移行された。当初、同人らは、映画において伝統的シュジェートが蔓延し、観客の興味を惹きつけなくなっている現状を、「脱物語性」へ向かう根拠としていた。やがて、この方針は、「物語性」によって成形される前の作品の「素材」という、いわばリアルに対する、同時代人の関心の高まりによっても説明づけられるようになった。

こうしたことからわかるように、ファクトの文学の「脱物語性」とは、古典作品などからとられた既存のイメージが現実に置き換わっている 1920 年代の文学状況に対するアヴァンギャルドの応答として、伝統的「物語性」を文学から剥ぎ取り、リアルな「素材」そのものに迫ろうとする試みだったのである。

(こみや みちこ、日本学術振興会)

【A02】ヴィクトル・ペレーヴィンの小説における自己形成としてのアイデンティティの問題

占部 歩

ロシアの現代作家ペレーヴィンの作品はしばしばアイデンティティの探求をテーマにしている。国内の先行研究では、「空虚」の表象など、アイデンティティの仮託先としての国家的共同体が失われたポストソ連ロシアのナショナルなアイデンティティの描かれ方を中心に作品が論じられてきた。その一方で作中の主人公自体に着目し、ポストモダン時代における個人の自己実現としてアイデンティティの問題を論じたものはまだ多くない。『チャパーエフと空虚』(1996)や『ジェネレーション P』(1999)といった作品は、いずれもソ連崩壊を契機として落伍した主人公が出会いと修行を通して自己形成する過程を描いたものであり、一種の教養小説としても読めるものである。

本発表では、ペレーヴィンのいくつかの作品を取り上げ、ソ連崩壊によってアイデンティティの危機を経験した主人公たちが様々な体験によって自己形成していく過程を考察する。作品を分析するに当たってはミハイル・バフチンが教養小説の準備段階の一つとして示した「遍歴小説」の枠組みを利用する。

「遍歴小説」とは、空間を動く点として表象される、内面を欠いた主人公の体験を、出来事への世界の分解を特徴とする「冒険の時間」に基づいて描くもので、上に挙げたペレーヴィンの長編によく当てはまる。「遍歴小説」においては主人公の境遇が結末においてしばしば激変するが、これらの作品でも主人公たちは結末で悟りを開き、一種の「全能感」をもつに至る。世界が自己の内面において再構成され、自己と同一化した結果、「世界を創造する力」を得る。これは、単なる「大きな物語」への懐古や、過去への回帰といった旧来の価値観に基づいた自己形成ではなく、断片化した世界を自身の内面において再構築することで成立する、ペレーヴィン独自のアイデンティティ形成の試みなのである。

(うらべ あゆむ、大阪大学院生)

**【A03】 Визуальные описания в поэме «Реквием»
А. Ахматовой**

СЮН Цзун-Хуэй

Данная статья посвящена проблемам визуального изображения в поэме «Реквием» Анны Ахматовой. По сравнению со степенью изученности звуковых изображений в поэме, данная проблема изучена в гораздо меньшей степени, несмотря на то, что визуальные описания, визуальная лексика в тексте поэмы достаточно частотны, например: “И прямо мне в глаза глядит”, “Ночи белые глядели”, “Чтоб я увидела верх шапки голубой”, “Как из-под век выглядывает страх” и др. А визуальные слова и словосочетания в тексте, такие как «звезды смерти», «желтый месяц», «огромная звезда», «звезда Полярная», «ястребиное жаркое око» и так далее, не должны считаться бессмысленными - напротив, они наделены особыми богатыми визуальными метафорическими и метонимическими смыслами.

Посредством подобного рода визуальных слов и фраз автор поэмы изображает в поэме страшную атмосферу вокруг лирической героини. Эта атмосфера воспринимается ею как плотная визуальная сеть, в которой она чувствует себя находящейся под постоянным контролем. Манера изображения Ахматовой в «Реквиеме» вписывается в круг проблем, связанных с властью, о которых рассуждает Мишель Фуко в своем произведении «Надзирать и наказывать». Рассматривая визуальные изображения Ахматовой в «Реквиеме» с точки зрения «паноптического наблюдения», мы сможем понять, что подразумевается в поэме под выражениями «огромная звезда», которая «прямо в глаза героини глядит». Вышеупомянутый пример является метафорой повсеместного надзора, который был свойствен тоталитаризму Сталина и являлся источником страха народа во время Большого террора.

Глаголы смотреть, видеть, глядеть образуют в «Реквиеме» Ахматовой визуальный мир, в котором ясно видно, что наблюдающее всеобъемлющее око и наблюдаемые объекты находятся в совершенно неравном властном положении. Кроме того, визуальные глаголы еще и указывают на тот факт, что все сцены несчастья и страдания, описанные в тексте, представлены сначала как статичные кадры, зафиксированные в глазах лирической героини, а затем они введены в ее память для долговременного сохранения.

(熊宗慧、国立台湾大学)

**【A04】 Культурно-семиотический подход к пьесе
С.М. Третьякова «Рычи, Китай!»**

Янь Дин-Цзя

По мнению Ю.М. Лотмана, катастрофы («взрывы») представляют собой важный фактор для развития культуры и истории. С этой точки зрения Октябрьская революция оказала огромное влияние как на русский, так и на мировой исторический и культурный процесс. Советская власть установила идеологический диктат, что определило доминантную роль левого искусства, а впоследствии способствовало формированию соцреализма.

Русский футурист С.М. Третьяков (1892-1937) является одним из главных теоретиков «литературы факта» и воплотил свои творческие принципы в пьесе «Рычи, Китай!» (1925). Созвучная революционному духу того времени, эта «агитационная» пьеса имела богатую сценическую историю: после премьеры в театре им. Мейерхольда (23 января 1926 г.) она шла по сценам разных стран. Однако по разным причинам пьеса со временем исчезла из репертуара советских и зарубежных театров. Последние постановки были в 1975 году в швейцарских городах.

В 2015 году на пьесу обратил внимание польский режиссер Павел Лысак и поставил спектакль «Рычи, Китай!», поскольку считает пьесу, написанную 90 лет назад, актуальной и для нынешних дней – эпохи «растущего расслоения общества и борьбы культур, связанной с ситуацией в Сирии, проблемой беженцев в Европе, в Польше».

Слова П. Лысака стимулировали автора данной статьи задуматься над тем, как рождаются новые интерпретации текста и как они, в свою очередь, меняются в разных культурно-исторических условиях. В последние годы «Рычи, Китай!» исследуется либо с точки зрения ее жанровой специфики, либо как образец агитационного искусства. Автор статьи, опираясь на семиотического принципа анализа текста, рассматривает структуру пьесы, анализирует ее «семиосферу», чтобы выявить скрытые в ней смыслы.

(鄢定嘉、国立政治大学)

【A05】ドストエフスキーの長編『カラマーゾフの兄弟』の構成におけるパーヴェル・スメルジャコフの意味的内容

樋口 稲子

パーヴェル・スメルジャコフという登場人物について、ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』を執筆する前に、友人に宛てた手紙の中で、その人物創造に他の主人公よりも苦労した事を伝えている。実際に作品の中でもスメルジャコフが他の主人公よりも異彩を放っている事は感じ取れ、この人物は他の登場人物とは違う役割を持っているのではないかという直感が働く。ドミートリー、イワン、アリョーシャの3人は、それぞれ「イデエの人」として登場し、人物を表現する現実の具体的要素は極めて薄い。イワンなどは、年齢以外にはっきりした肉体的描写は殆どない。3人の兄弟が、作家の意図で、「イデエの人」として創造されているのに対し、スメルジャコフは「受肉した存在」として作られている。

勿論、彼もイデエの人としての一面は持っている、イワンの分身という側面もあるが、プロットにおいて彼は、最も現実性、具体性を与えられて「受肉した」存在である。彼の生活、生活環境、彼の人間性と人生の歴史を作ってきた素材は同質のものである。犯罪の実行者と自ら成って兄弟の中で、唯彼だけが世界を閉じて行く。この点、他の3人の兄弟がカーニバル的な人生構成を用意されて将来に向けて開かれ、人間の更新が企てられているのに対し、スメルジャコフのみが自伝的なプロットを与えられ人生を完結している。つまり、他の3人の兄弟のカーニバル的な人生構成と対照的にスメルジャコフのそれは自伝的な一方向の構成であって、3兄弟は未来のあらゆる可能性に向かうのに対し、スメルジャコフは殺人という罪の贖罪を果たす方向に向かっている。

ドストエフスキー文学の特徴であるカーニバル性と混じってスメルジャコフの一義性が当然のように組み込まれており、そして一見このカーニバル性と調和不可能なスメルジャコフの一義的存在(言動)が、実際には各主人公たちのプロットの進行を導き、フェアブラを深化させている。本報告ではスメルジャコフの存在が果たす構成上の意味について述べたい。

(ひぐち いねこ、早稲田大学院生)

【A06】ドストエフスキーの《大審問官》とオドエフスキーの《ベートーベン晩年のカルテット》における対話表現の比較研究

泊野 竜一

ドストエフスキーの《大審問官》の中の大審問官とキリスト(と思しき男)との「対話」と、オドエフスキーの額縁小説『ロシアン・ナイト』の一挿話である《ベートーベン晩年のカルテット》の中のベートーベンとリーザとの「対話」に注目し、両者の対話表現を分析し比較することを試みる。

《大審問官》において、大審問官はキリスト(と思しき男)を前にして一方的な長広舌を続けており、キリストはあくまでこれを拝聴するのみという独特の「対話」が登場する。一見この「対話」は独白のように思えるが、その実、両者の間には通常の相互通行の対話よりもより豊かな心的対話が行われているとの研究をこれまで行ってきた。

オドエフスキーの《ベートーベン晩年のカルテット》においても、形式としては、《大審問官》におけるものと同様な「対話」が登場する。この「対話」の中でベートーベンはその弟子のルイーザを前にしてやはり一方的な長広舌を揮う。ベートーベンの独白の内容は芸術論であり、晩年困窮に陥ったベートーベンを援助するためにその弟子にとどまっているルイーザにその「対話」の内容を理解するのは困難であると考えられる。オドエフスキーがベートーベンの独白の聞き手としてルイーザを敢えて登場させた理由はいかなるものなのであろうか。

まず、ドストエフスキーの《大審問官》の中では、大審問官はキリストに対してしばしば問いかける形でその長広舌を続けている。《ベートーベン晩年のカルテット》の中でも、ベートーベンはその長広舌の途中で、ルイーザに対し何度も呼びかけを行う。このように長広舌を揮う話し手が、あくまで沈黙を守る聞き手に問いかけることで、一種の「対話」が行われているかのような印象を付与することができる。

ついで、長広舌を揮う話し手に対して、あくまで長広舌を拝聴する聞き手が配置されていることにより、たとえ聞き手が返答を行わないとしても、話し手は問いかけを行うことができる。つまり、沈黙を守る聞き手というキーパーソンを登場させることで、一方的な独白を自問自答の形の対話に昇華させることを可能とする対話表現が創造されているのである。

オドエフスキーはドストエフスキーに先んじてこの沈黙を守る聞き手が登場する対話表現を創出し、ドストエフスキーは聞き手を積極的に対話に参加させるということで、この対話表現をさらに豊かなものとしているのである。

(とまりの りょういち、早稲田大学院生)

**【A07】ゴーゴリ作品におけるウクライナの表象：
失われた過去とノスタルジー**

大野 斉子

ゴーゴリ作品の受容には時代による波が見られ、ゴーゴリの活躍期以降は、1870 年代以降にリバイバルの時期がやってくる。リバイバルはゴーゴリの様々な作品において認められるが、特に子供や地方住民、民衆など年齢・階層・文化的背景の異なる多様な読者を獲得し、根強い人気を見せたのがウクライナ（小ロシア）を舞台にした『ディカニカ近郷夜話』『ミルゴロド』に収録される作品群であった。

本報告では、ウクライナを描いた作品が人気を得た理由や、作品が広く受容されることがもたらした社会的な想像力の変化を、ゴーゴリ作品におけるウクライナの表象の分析を通じて、諸作品に共通して提示されるテーマとも関連付けながら考察する。

ウクライナを舞台にしたゴーゴリの諸作品で展開される物語は多様だが、多くに共通するのが「死」や「破滅」という結末であることに注目し、『ミルゴロド』に収録された作品の語りの構造と作品内モチーフの解釈を行う。これを通じて諸作品に喪失の物語という寓意を見出すとともに、ウクライナの土着的世界が、失われた過去として示されていることを論じる。

さらに、ゴーゴリの同時代に描かれた他の作家によるウクライナの表象との比較を通じて、それらに見られる一定のパターン（収奪される豊かな大地、異界としての土地）を抽出する。ウクライナ（小ロシア）は、地理的な場所であるばかりでなく、喪失された過去という役割を担い、ノスタルジーを生み出し続ける想像上のトポスとなる。

ただし、ゴーゴリの描くウクライナは、ロシアから見た外部的な世界としてではなく、「我々」の過去を構成する一要素として受けとめられた。特に 1870 年代以降の読者にはその傾向が強く見られるが、それには小ロシアを含むロシア帝国の版図だけでなく、ゴーゴリ作品に固有の表象構造が関わっている。ゴーゴリのウクライナものが 19 世紀後半の読者たちの自己意識とどのように響きあったかについて考察する。

（おおの ときこ、宇都宮大学）

【B01】«Можно»の助詞用法—コーパスを用いた統語的分析

東出 朋

本発表は、通常は可能性や許可のモダリティを表すとされる副詞"можно"の特殊な用法である助詞用法を取り上げ、その統語的特徴を、副詞用法と比較しながらコーパスを用いて記述することを目的とする。

通常"можно"は動詞の不定形とともに用いられ、動詞の意味上の主体は与格でマークされるが、辞書に記述されていない用法として、疑問を表す助詞として用いられることがある。

(1) Можно я пройду? (НКРЯ)

この用法については、80 年文法が動詞未来時制で許可求めの疑問文を開始する疑問助詞としての機能をわずかに指摘しているのみである(РГ80, Т2, С388)。では、副詞用法"Можно мне гл-имф?"と助詞用法"Можно я гл-буд.вр.?"の違いは何だろうか。

(2) Можно мне своё мнение сказать? (НКРЯ)

(3) Сейчас можно я скажу? (НКРЯ)

Национальный корпус русского языка (НКРЯ)から"можно"の助詞用法と副詞用法を抽出し分析した結果、以下の特徴が明らかになった。

助詞用法と副詞用法の対照という観点から、助詞用法は、ほぼ"я"（まれに"мы"）としか共起せず語順に制約がある("Можно я~?"のみで、"Я можно~?"にはならない)のに対し、副詞用法は、全ての人称と共起し語順の制約もない。また、副詞用法は様々な文（平叙文、疑問文、感嘆文）で用いられ従属節内の成分にもなる。つまり、助詞用法は副詞用法より統語的制約が強い。また、副詞用法の疑問文に限ってみると、一人称単数の真偽疑問文"Можно мне~?"が優位に多い。

統語的に様々な環境で使用可能である副詞用法において、一人称単数の"Можно мне~?"という句は際立っている。そしてこれは、一人称単数としか共起しない"Можно я~?"と共存している。しかし、"Можно я~?"のほうが"Можно мне~?"より一般的である。

コーパスによると、副詞用法は 1800 年代から使用が確認され継続して用いられているのに対し、助詞用法は 1840 年代に出現し 1960 年代以降使用数が急激に増加している。この通時的な事実は、"Можно я~?"が新しい形式であり、徐々に一般化しつつあることを示している。

（ひがしで とも、国立釜慶大学校）

【B02】 Тоска と Хандра その日本語訳について
福安 佳子

他言語に翻譯困難なロシア語の一つで、ロシア人のメンタリティーを反映している Тоска という言葉について、その意味を空間をめぐる世界観の違いの観点から考察し、しばしば同義語で用いられている Хандра との相違点、これまで用いられてきた日本語の譯語の問題点について述べたい。

Тоска という言葉は、日本で最初に「ふさぎの虫」として二葉亭四迷によって譯出された。マクシム・ゴーリキーの Тоска という表題の作品 (1896 年) の翻譯 (1906 年) であった。「ふさぎの虫」はその後多くの翻譯家に採用され定譯化されていく。

日本語において、精神的憂鬱を表す言葉として「気が滅入る」、「塞ぎがちになる」、「落ち込む」などの言葉があり、心の居場所の狭まりの表現が、この精神状態を表す言葉として用いられることから、「ふさぎの虫」もこの系列を酌んだすばらしい造語である。が、この譯語は、実は Тоска よりむしろ Хандра の譯語に近いことを指摘する。その理由は、Тоска のあらかわす広い空間性、Хандра のあらかわす狭い空間性にある。

ロシア人の感性と空間認知の特殊性とのつながりは多くの研究者に指摘されているところであるが、Тоска のもつロシア語としての特殊性、つかみどころのなさ、日本人が日本の精神習慣によって同様の心の動きを「深み」、「閉鎖性」と捉え、その意味が反映された譯語をあてたことから、ロシア語の Тоска が含意する「空間的広がり」を感じ取ることが難しくなっていることによって生じる。一方、ラテン語からの借用語の Хандра の状態は、決まりきった空間、しばしば狭いけれど уютное な空間の中の繰り返しの生活の中で生まれる。この Тоска と Хандра との意味の違いは、プーシキンの時代には顕著に使い分けがなされているが、時代が下るにつれて同義語のように扱われていっていることも文学作品の中の例文を交えながら指摘する。

ロシア人が「空間の広がり」を好む、「型にはまることをきらう」ことを含意する他の言葉、Воля、Удаль など、Тоска と同じ空間的広がりを持つ言葉として、空間性についての理解を深めるために触れていく。

(ふくやす よしこ、関西支部)

【B03】 Глаголы затрудненного перемещения в русинском языке Воеводины

ОКАНО Канаめ

Концепт ‘перемещение’ представляет собой одно из самых основных и важнейших понятий в когнитивной деятельности человека. Данный концепт, как уже хорошо известно, лексикализуется с помощью широкого ряда глагольных лексем в разных языках света. Русинский литературный микроязык Воеводины, являющийся одним из официальных языков автономного края Воеводины Республики Сербии, так же как русский и остальные славянские языки, располагает достаточно большим количеством глаголов, описывающих разные ситуации перемещения, но их лексикализация пока остается малоизученной темой в области русинской микрофилологии, и в связи с этим требуется системное описание глагольных лексем русинского языка, относящихся к данному семантическому полю. В настоящем докладе мы будем уделять внимание некоторым русинским глаголам перемещения, в частности, одной небольшой группе глаголов со значением затрудненного перемещения, таких как *цагац ше* ‘идти/ходить с трудом’, *вляциц ше* ‘тащиться/таскаться’, *рачкавац* ‘ползти/ползть’, *храмац* ‘хромать’, *шквинтац* ‘хромать; прыгать на одной ноге’, *кивац ше* ‘шататься; идти/ходить, шатаясь’, *тачкац ше* ‘шататься’, *плянтац ше* ‘качаться на ногах’, *талябац* ‘идти вброд (в воде, в болоте и др.)’. Глаголы затрудненного перемещения, по сравнению с более основными и типичными глаголами перемещения, все еще находятся на периферии исследований, и их семантика и дистрибуция до сих пор подробно не рассмотрены в рамках русинской и славянской лингвистики. Целями данного доклада являются составление системного описания семантики русинских глаголов затрудненного перемещения и определение релевантных семантических параметров, по которым могут противопоставляться глагольные лексемы изучаемого нами семантического поля. Корпусом для нашего исследования служат языковые материалы, собранные в Интернете, примеры из литературных произведений и других публикаций, а также данные из анкеты, проведенной нами с носителями русинского языка Воеводины во время полевого исследования.

(оかの かなめ、神戸市外国語大学)

【B04】古代ロシア語文献におけるハザールについて

恩田 義徳

ハザールはテュルク系の遊牧民族で6世紀ごろ西突厥の影響下でカスピ海沿岸ステップに進出し、7世紀にハザール可汗国を形成し独立する。東ローマ帝国とはクリミア半島の領土権を巡って対立をする一方で、ペルシャやアラブといった敵と共闘し皇帝と婚姻関係を結ぶなど関係が深い。同じ時期に存在した大ブルガリアを打ち破り、南ロシアのステップの覇権を握り、ルーシを含む周辺の諸民族に貢納を課して支配下に置いた。

おそらく9世紀にユダヤ教を国教とし、ヨーロッパのキリスト教とアラブのイスラム教との間で独自の立場をとることになる。この頃のエピソードがスラブ研究にとって基礎文献となる「コンスタンティノス伝」にも見られる。モラビア伝道を前にコンスタンティノス＝キュリロスは兄メトディオスを伴ってハザールの地に赴き、可汗の前で宗教論争をくりひろげる。王の眼前での宗教論争は文学的脚色を含み聖者伝特有のフィクションもあるが、この場面は「コンスタンティノス伝」全体のおよそ3割を占め、これが書かれた当时には非常に重大な問題であったことがうかがえる。

10世紀になると衰退を始め、956年にキエフ大公スヴァトスラフの遠征によって崩壊する。

ハザール自身の残した記録はほとんど無く、関係のあった民族が残した記録が歴史的史料となる。『ロシア原初年代記』にもハザールの名前は頻出し、古代ルーシの人々との関係の深さがうかがえる。

本研究では『原初年代記』を対象としそこに描かれているハザールから何が見えてくるのかを検討する。一例を挙げれば『原初年代記』ではキエフの創設についてキー、シチェク、ホリフという3人の兄弟をその由来としているが、これに対してN. Golb and O. Pritsak, *Khazarian Hebrew Documents of the Tenth Century*, CORNELL UNIVERSITY PRESS, 1982ではこのエピソードを年代記のフィクションとし、ハザールの役人か、QYYWBという人物が関係することを指摘している。この説は日本ではあまり知られていないと思われるが、ルーシの歴史上の問題として検証が必要である。

(おんだ よしのり、東京外国語大学)

【B05】 Акцентуация форм глагола *умрети* в Острожской Библии 1581 года

ДАЦЕНКО Игорь

Доклад посвящен анализу акцентуации форм глагола *умрети*, засвидетельствованных в Острожской Библии 1581 года. Созданный на территории современной Украины (г. Острог Ровенской области), этот памятник примечателен тем, что над переводом Библии работала группа книжников из разных восточнославянских регионов. Кроме того, на Острожскую Библию большое влияние оказала созданная в 1499 г. в Новгороде Геннадиевская Библия. Существенное различие этих двух памятников проявляется в отсутствии акцентовки в Геннадиевской Библии и наличии знаков акцентуации в Острожской Библии. Таким образом, Острожскую Библию называют первым акцентуированным памятником украинского языка.

Целью данного исследования является наблюдение над поведением акцентной кривой глагола *умрети* в Острожской Библии и сопоставление ее с акцентными характеристиками этого глагола в истории русского и украинского языков. Подобный анализ делается впервые.

В Острожской Библии на материале форм глагола *умрети* засвидетельствована кривая акцентной парадигмы (а. п.) *b*, отличающаяся от кривой современных русского (а. п. *b* и *c*) и украинского языков (а. п. *c*), а также от реконструированной акцентной кривой праславянского языка (а. п. *c*). В украинском языке на протяжении истории его развития, очевидно, акцентовка глагола *умрети* не подвергалась существенным изменениям. Однако в русском языке были сдвиги ударения в сторону акцентной парадигмы *b*, а потом обратно в сторону акцентной парадигмы *c* в единственном числе со следующим выравниванием акцентной кривой во множественном. Материал Острожской Библии отображает один из этапов развития акцентуации глагола *умрети* в презенсе по русскому типу. Этот вывод также подтверждается анализом ударений форм прошедшего времени исследуемого глагола. Следовательно, ставится под сомнение украинская основа языка Острожской Библии.

(ダツエンコ イーホル、中京大学)

【B06】 Язык и революция: три подхода к языковой политике в раннесоветский период (20е – 30е годы)

БЛИНОВ Евгений

В ходе Культурной революции и кампании по борьбе с «буржуазной наукой» в конце двадцатых — начале тридцатых годов ряд советских лингвистов выступил с критикой утверждения Фердинанда Соссюра о невозможности для говорящих сознательно влиять на изменения языка. В своей полемической статье «Ф. де Соссюр о невозможности языковой политики» один из основателей ОПОЯЗа Лев Якубинский интерпретирует его как «недостижимость языка не только для индивида, но и для массы говорящих, для коллектива», что означает невозможность языковой политики как таковой, а следовательно ставит под вопрос проводимую в раннесоветский период политику «возрождения» национальных языков.

В своем докладе я выделяю три возможных точки зрения на вмешательство в ход языковой эволюции. Первый подход, представленный Якубинским и ставший в 30-е годы частью официальной марристской доктрины, я обозначаю как «волюнтаристский». Он предполагает возможность для «массы говорящих» преобразовывать как разговорный, так и литературный язык, хотя в работах Якубинского или Николая Яковлева, по сравнению с «наивным» волюнтаризмом Марра, это процесс ограничен целым рядом условий.

Второй подход я обозначаю как «акселерационистский». Он представлен теорией эволюции языка Евгения Поливанова, выступившего с резкой критикой лингвистических работ Марра. Поливанов полагал, что ход развития языковой эволюции строго детерминирован, но от языковой политики или «внешних факторов» зависит сам факт эволюции, а также скорость этих процессов.

Наконец, третий подход, который я обозначаю как «нормативистский» или «литературоцентрический», представлен более поздней советской школой «истории литературного языка». В «Очерках по истории русского литературного языка XVII-XIX веков» и «Языке Пушкина» Виктор Виноградов представляет «историю литературного языка» как историю становления и синтеза русского языка как «общего языка нации» или орудия «надклассового господства».

(ブリノフ エフゲニー、
ロシア科学アカデミー哲学研究所)

【B07】 Лингвистические основы и минимизация материала при ускоренном изучении русского языка

ЛАСКАРЕВА Елена

Определяемые общим языкознанием ярус языка — предложение, словосочетание, слово, морфема, фонема — дают базу для описания русского языка в целях его эффективного и комфортного для обучаемых преподавания (по Ю.В. Рождественскому). В основе нашей концепции лежит постулат о том, что систематизированная лингвистическая информация должна служить базой для практики преподавания. Новый подход в том, что теоретические знания представлены для учащихся в комплексе упражнений, позволяющих овладеть особенностями языковой формы мысли на русском языке. Ниже суммируем основополагающие принципы.

1. Мелодика русской фразы и артикуляция: аудирование и имитация актуальной для коммуникации лексики и фраз (см.: сравнение звуков с музыкой у А.А. Потебни). Лексико-грамматические особенности даются в авторской системе, которая апробировалась на разных группах учащихся, в том числе японских.

2. Фонетика: особенности артикуляции; деление на слоги и ударение. Алфавит и правила чтения изучаются при чтении географических названий.

3. Понятия о частях речи. Список основных глаголов, их спряжение. Глагольные конструкции. Способы расширения лексики.

4. Морфемный анализ: инфинитив глагола. Актуальные суффиксы и префиксы. «Азы» словообразования и словоизменения.

5. Построение предложения. Синтаксис: глаголы и конструкции, употребляемые с каким-либо падежом. Морфология: падежные окончания и др.

6. Порождение высказывания: моделирование фраз и микротекстов на русском языке (устных или письменных) — с учетом времени.

7. Понятие стилей: неформальное и формальное (официальное) общение.

Авторская позиция отражена в трех учебниках, объединенных общей концепцией: координация теоретических знаний с отработкой практических навыков: тщательный отбор минимизированного материала и обязательный показ перспективы его расширения; обязательный выход в коммуникацию на примере моделирования высказываний.

(ラスカリヨワ エレーナ、ペテルブルグ大学)

【C01】B. Ф. オドーエフスキーの音楽思想—『ロシアの夜』と以後への展開

三浦 領哉

これまで報告者は数回にわたり本学会において報告を行い、B.Ф.オドーエフスキーの音楽思想について、1820 年代初頭の哲学論文から 1830 年代中盤の音楽小説に至るまでを対象に研究することによってその思想的源泉と変遷を明らかにしてきた。その結果、オドーエフスキーの音楽思想におけるその表現媒体は 1820 年代の哲学論文から 1830 年代前半の音楽小説を経て 1830 年代末には音楽評論へと移行し、それと同時に音楽思想の対象は音楽哲学から音楽美学・音楽受容の方法論へと変化していることが明らかとなった。また昨年度の本学会における報告では連作小説『ロシアの夜』のうちとりわけ『ベートーヴェン最後の四重奏曲』『セバスチャン・バッハ』を対象とし、当初音楽哲学の論文をその思想表現の媒体としていたオドーエフスキーがどのようにして本作を執筆するに至ったか、また本作とオドーエフスキーの音楽思想との密接な関わりを指摘し、作中でどのように音楽が論じられているかを考察した。その結果、オドーエフスキーが作中で新しい音楽哲学、とりわけ和声論における革新的概念である「和声の全一性」と、同時にそれまでのロシアにはなかった、近代音楽学の基礎となる形式主義的音楽受容論を提唱していることが明らかとなった。

今次報告では、その対象を前掲 2 作から『ロシアの夜』全体に広げるとともに、作品の第二版出版時に収録される予定であった「序言」「『ロシアの夜』への注釈」「ロシアの夜、あるいは新しい学問と芸術の必要性について」についても検討し、オドーエフスキーの音楽哲学・音楽美学だけでなく、その背景となった芸術哲学・一般美学についても考察する。報告者は従前よりオドーエフスキーの音楽思想における新プラトン主義の強い影響を指摘してきたが、本報告では芸術哲学・一般美学におけるそれについても検討を行う。また同時に、本作品におけるオドーエフスキーの音楽思想の同時代的「新しさ」にも注目したい。

『ロシアの夜』ののちオドーエフスキーは音楽評論をその音楽思想の表現の舞台とすることになるが、『ロシアの夜』では西欧音楽を主題として音楽思想が披瀝されていたのに対し、この 1840 年代の音楽評論からは一転してとりわけ「音楽におけるロシア性」が中心的なテーマとされるようになる。本報告では『ロシアの夜』を越えてその次の時期に入るまでのオドーエフスキーの音楽思想を考察する。

(みうら れいや、早稲田大学院生)

【C02】再考：国民学派とポスト国民学派

一柳 富美子

本発表は、ソ連時代に情報が操作されていたロシア音楽学に関して報告者が継続的に行っている情報修正、特に 19 世紀ロシア音楽の新しいパースペクティブを提示する研究の一環である。今回はロシアでの一次資料公開進展に伴う 19 世紀後半ロシア国民楽派および後続するポスト国民楽派の再考を試みる。

永年、日本に於ける 19 世紀後半のロシア音楽史は、1860～70 年代が西欧派 vs. スラヴ派の対立を制した「国民楽派」を中心とする歌劇・管弦楽の隆盛、それ以降が「ポスト国民楽派」の作曲家たちによるピアノ音楽・室内楽の時代、と捉えられてきた。しかし実際には、19 世紀初頭から一貫して、ロシア音楽界の中心的存在だった貴族のサロンやホームコンサートでは常にピアノ音楽や歌曲、室内楽が主流を占め、現在に近い形の管弦楽演奏会は殆ど存在しなかったことが明らかとなった。珍しいからこそ、1867 年 5 月に開催された管弦楽演奏会「スラヴ音楽の夕べ」は、同演奏会を支えた「力強い仲間たち(所謂ロシア五人組)」の成果が評論家スターツフによって大々的に喧伝され、以後の誤ったロシア音楽史観を生むことになったと考えられる。1870 年代の定期刊行物で扱われた記事が最も多かった音楽家は、ヴェルディお気に入りのイタリア人ソプラノ歌手アデリーナ・パッティ、次いでワーグナー、ロシア人の中では「西欧派」の代表である A. ルビンシテインが最多だった事実も、「国民楽派」の影響力や実態に疑問を投げかけるのに有力な傍証であろう。

1862 年と 66 年に開校した 2 つの音楽院でも、中心となったのはピアノ科と声楽科で、卒業生の成果がロシア音楽界に反映されるようになったことが世紀末のロシアピアノ音楽隆盛時代を生み出した。決して「ポスト国民楽派」と語れるほどに本体の「国民楽派」は強固な存在では無かった。

今回発表者が調査したのは、1841～1916 年まで続いた音楽楽譜雑誌『Нувеллист』、1860～70 年代の演奏会情報、1870 年代の定期刊行物データ便覧及び 1866 年に開校したモスクワ音楽院第 1～3 期生の在校生資料である。データを丹念に追っていくと、ソ連時代に隠されていたロシア音楽史の興味深い姿が浮かび上がってくる。

(ひとつやなぎ ふみこ、和光大学)

【C03】 Визуальная поэтика советской повседневности в кинотекстах Марлена Хуциева
У Цзя-Цин

Данное исследование посвящено рассмотрению кинотекстов режиссера Марлена Хуциева в контексте культуры повседневности советского времени. Для визуальной поэтики Хуциева характерны и лиричность, и поэтичность, и реалистичность. В своих лентах, представляющих период «оттепели», таких, как «Весна на Заречной улице», «Мне двадцать лет» и «Июльский дождь», режиссер старался воссоздать меняющуюся атмосферу переходного периода, вплетая в ткань киноповествования отрывки впечатлений от окружающей действительности.

В данном исследовании, основанном на принципах структурализма и семиотики кино, особое внимание уделяется способам выражения и трансформации повседневности советского времени сквозь призму анализа кинотекстов Хуциева в период «оттепели». На творчество Хуциева повлияли итальянский неореализм и французская новая волна. В то же время, этот исторический период связан с ослаблением давления господствующей официальной идеологии на сферу искусства. Соответственно, режиссер непрерывно стремился выйти за рамки устоявшихся традиций социалистического реализма и смело использовал разнообразные способы, для того чтобы сохранять историческую память (например, появляются такие новые формы выступлений, как поэтический вечер и квартирник), выражать двойственную реальность, а также выдвинуть на первый план проблемы взаимопониманий между поколениями. В составленных из отрывков повседневной жизни кинотекстах показывается развенчание пафоса революции и веры в прекрасное будущее.

Таким образом, несмотря на то, что кинокартины Хуциева как «культурный текст», с одной стороны, демонстрируют безвыходность, в которой оказываются их герои в означенное время, их беспомощность в реалиях той жизни, однако с другой стороны, этот «текст» является свидетельством разностороннего и многогранного развития советского киноискусства в середине XX в. В то же время, в этих картинах во многом предсказывается и конец периода «оттепели».

(吳佳靜、国立政治大学)

【C04】 キラ・ムラートワの編集と物語の関係

梶山祐治

現代ロシア最大の映画作家とみなされることも多かったキラ・ムラートワ (1934-2018) は、ソ連映画史で比較的自由的な芸術表現が許された雪解け期後期にデビューした。この束の間の自由が訪れた時期には新しい映像表現を備えた作品が多く出現したが、彼女の作品は、観客が心地よく身を委ねることが可能な直線的なナラティブとは一線を画するという点において、雪解け期映画のなかでも一層際立った特徴を持っていた。

回想映画である最初の長編映画『短い出会い』(1968) は、ヴィソツキー演じる男性をめぐる二人の女性の回想が十数個の断片に細分化されて現在に編み込まれることで、「短い出会い」の物語を語る。長編第 2 作『長い見送り』(1971) においては、同じシーンが 3 回繰り返される演出が 2 箇所存在する。これは、彼女の映画の「普通でない」部分について言及される際、よく話題となる「反復」の演出の最初のものである。第 2 作に早くも登場するこの「反復」は作品演出上の思い付きではなく、長いフィルムグラフィにおいて彼女固有の演出として度々現れることになる。最後の作品『永遠回帰』は、同一シーンが異なる役者によって演じられるという、映像と言葉の反復を究極的な形で実現したかのような作品であった。

ムラートワは撮影と同時に編集の仕事を重要視し、後者を「神の仕事」と呼んでいる。撮影した映像を撮影順に編集しただけでは、決して現在見られるような彼女の作品にはならない。映像による物語作りという、独自の世界を構築するためのポストプロダクションの過程で彼女は、ソ連映画のみならず世界映画史上でも類例を見ないタイプの編集を行った。本発表は、ムラートワ固有の編集の技に焦点を当て、物語がどのように語られているのかを分析するものである。

(かじやま ゆうじ、東京福祉大学)

【C05】不条理空間としての地下鉄—アンドレイ・イ監督『パイロットたちの科学捜査課』における地下鉄表象分析

本田 晃子

スターリン時代に建設が開始されたモスクワの地下鉄駅は、その豪華さからしばしば「地下の宮殿」と称された。現代ロシアの思想家ミハイル・リュクリンは、地下鉄駅を宮殿に例える当時の言説を、「地下鉄言説 (метродискурс)」と名付けている。映画をはじめとするイメージの領域でも、これらの地下鉄駅の表象は地下鉄言説を補強し、首都モスクワの特権的なイメージを構成してきた。この首都イメージとの一体性ゆえに、フルシチョフ時代にソ連建築の規範が変化し、地下鉄駅のデザインが大幅に簡素化された後も、ソ連映画の中では地下鉄空間を否定的に描くことは避けられてきた。

ソ連の解体を経て、このタブーはようやく破られはじめる。わけてもアンドレイ・イ監督による『パイロットたちの科学捜査課 (Научная секция пилотов)』(1996 年公開)は、地下鉄を不条理な暴力の横溢する空間として描き出す、挑発的な作品である。本報告では、地下鉄駅の壮麗なイメージに焦点が当てられがちであった既存の研究に対し、地下鉄言説への挑戦という観点から同作品をとりあげ、そこにおける地下鉄空間の表象を分析していく。

物語は、地下鉄駅における殺人を装った何者かのいたずらからはじまる。いたずらはやがて本物の殺人へ、さらには大規模テロへと発展していく。同作品における地下鉄駅は、物乞いやツアーの客引き、紛れ込んだヤギや犬などが徘徊する猥雑で混沌とした空間であり、トンネルの闇の奥では運転手たちや特殊部隊の兵士たちが無差別に殺害されていく。主人公らは「科学的な」捜査方法によって犯人を特定し追い詰めようとするが、この物語においては追われる側と追う側の関係は錯綜しており、最後まで犯罪の背景の合理的な説明は行われない。

本報告では、まずソ連時代の映画における地下鉄空間の描写と本作品における描写との比較を行い、その特異性を明らかにする。すなわち本作品では、明るく照らし出され意味によって満たされた地下鉄駅ではなく、合理的な読解を拒むトンネルの闇の空間こそが主題化されているのである。そしてこの地下鉄空間の不条理性と、物語の構造自体のもつ不条理性との関係を指摘する。これらの作業を通して、アンドレイ・イ監督がどのように地下鉄言説を解体しようとしたのか、その試みはどの程度成功したといえるのかを検証していく。

(ほんだ あきこ、岡山大学)

【C06】アルハンゲリスク州の笑話「コルニーロヴォの話」のテキストと語りにおけるフォークロアの諸要素

熊野谷 葉子

2015 年のアルハンゲリスク州フォークロア調査では、1947 年生まれの女性が巧みに語る「コルニーロヴォの話 (Корниловская быль)」が採録された。語り手の問いかけ「わたしがアルハンゲリスクに行った話、聞いた？」に始まり、田舎の女性二人が生まれて初めて都会へでかけてドタバタをひきおこし、帰って来るまでを語る、10 分ほどの笑い話である。タイトルにある「コルニーロヴォ」は実在の村で、「話 (быль)」という名称が示すように形式的には語り手の体験談である。もっとも、強烈な方言や描写される風俗の古めかしさ、内容の突飛さから実は体験談でないことは明らかで、語り手が 50 余年前に聞き覚え、以来手を入れて繰り返し語っているフィクションである。彼女は様々な行事でこの話をしているが、主な聞き手である地元住民や縁者にとって、旧知の村々や懐かしい方言、登場人物たちのいかにも田舎者らしい行動は面白く、非常に人気のある演目だという。

報告者は、当地で採録したフォークロア資料の整理と解析を進める中で、このセミプロの語り手による話芸をフォークロアとすることの妥当性と、そのジャンルの特性について検討した。プロの漫談とは異なり、この話は語り手の完全な創作ではなく聞き覚えたものであり、出版物やマスメディアに抛らず生の語りで伝えられ、話の本質である笑いが語り手と聞き手のローカルな共感に多くを負っている。またテキスト全体に伝統的なフォークロアジャンルと共通する要素を指摘できる。そこで本報告では、この語りの言語テキストとパフォーマンスに見られるフォークロアの諸要素について報告する。

この話は、昔話のファンタジックな世界観を持たないという点で「非昔話的散文(несказочная проза)」に分類されるが、このカテゴリーの中心を成す伝説やブイリーチカとはフィクションの自覚がある点で異なり、むしろアネクドートや世態昔話(новеллистическая сказка)に近い。そこで同様の特徴をもつ笑い話各種と比較しつつ、この話のジャンルの特性について検討する。一方文体面では、散文ではあるが随所に類似音の反復をともなう語結合や文が見られ、口承文芸独特のフォーミュラを形成するとともに独特のリズムが生まれている。このリズムと誇張表現、人物の突飛な行動は、道化歌(скоморошина)や空言(небылица)に通じる。報告では語り手のパフォーマンスを動画で見ながら語りの特徴を総合的に検証し、「コルニーロヴォの話」の語りを見る現代ロシア・フォークロアの一端を紹介したい。

(くまのや ようこ、慶應義塾大学)

【C07】ウクライナ古儀式派とチェルノブイリ原子力発電所事故

塚田 力

チェルノブイリ原子力発電所周辺のウクライナ国キエフ州の住民は、主流派のロシア正教会の信徒が多数を占めており、現在、基地周辺の強制避難ゾーンにはモスクワ総主教座に属する教会のみが存在している。しかし、事故以前のキエフ州は主流派の正教会以外に正教古儀式派（以下古儀式派）の会衆とユダヤ教ハシディズムの宮廷が存在している宗教的に多様な地域であった。

チェルノブイリ原子力発電所事故以前のキエフ州の古儀式派の歴史はセルゲイ・タラネツ博士の著書『キエフ市とキエフ県における古儀式派』（キエフ、2004年）で明らかにされている。チェルノブイリ周辺のポレシエ地域には18世紀にヴェトカ（現在のベラルーシ共和国ホメリ州ヴェトカ市）から移住した司祭派の古儀式派信徒が居住していた。

事故直前にはチェルノブイリ市内の会衆のほか、チェルノブイリ原発の西方に隣接した三つの古儀式派の集落（ビキチ、ザモーシニャ、クラシローフカ）が存在しており、全てロシア正教古儀式派教会（ベロクリニツキー派）に属していた。ソ連期の宗教政策によりウクライナにおいても古儀式派の活動は低調ではあったが、クラシローフカには古儀式派の教会が存在し、司祭が歴任していた。

事故後、チェルノブイリ市内とビキチ、ザモーシニャは強制避難地域となり、古儀式派信徒はすべて避難し、現在に至るまで墓参以外に帰還する者はいない。また、クラシローフカは事故対応の前線拠点となり大きく影響を受けることとなった。

地元住民としてだけでなく、原発職員、除染作業員、チェルノブイリから離れた地域の汚染地域住民として、ウクライナの古儀式派信徒たちは事故の影響を受けてきた。

ウクライナの古儀式派は出版物をほとんど残していないため、報告者は2017年1月5日から2月2日にかけて、セルゲイ・タラネツ博士の協力を受けウクライナのヴィンニツァ州、キエフ市、キエフ州において合同調査を行うことにより、正教古儀式派信徒たちに聞き取りを行った。

本報告では、ソ連期の抑圧により不活発だった教会活動という条件の中で、ウクライナの古儀式派の信仰が事故対応においてどのような役割を果たしてきたか、また、原発事故が古儀式派の信徒たちのどのように意味づけられそして語られてきたかを紹介したい。

（つかだ つとむ、北海道支部）

【C08】アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス—生産主義理論とその具象

大武 由紀子

本発表は、モスクワを舞台に終生フォトモンタージュを手法としてアジテーション芸術（雑誌及び新聞挿絵、ポスター、祝祭構築物等）を追求したラトヴィア人アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス（1895年～1938年）をとり上げる。

クルーツィスは、その所属した芸術家団体「レフ」（1922年～1925年）の綱領である、「生活建設」を主なテーマにする生産主義（理論）を、作品上に一定的に具象し、作品を通してそれを民衆に伝え、そしてアジテートすることを創作活動の主要な課題とした。そしてその制作のピークを第1次5カ年計画の時代、つまり1930年～1931年に迎えている。

発表者は、クルーツィスの作品を論じるにあたって、彼のアジテーション芸術の客体である生産主義理論を軸にとり、生産主義理論とクルーツィスの作品におけるその具象との相互の關係に着目する。

革命後の激動の時代に「レフ」の解体と共に生産主義理論も20年代の前半と後半においてその内容に変化を見せている。つまり20年代前半の理論は「レフ」の中心的理論家A. アルヴァートフ著『生産と芸術』（1926年）に展開される理論であり、クルーツィスはその理論を、雑誌『労働通報』『レーニン追悼号』（1926年）挿絵群の中でその具象を試みている。

他方20年代後半の理論は、「レフ」の構成メンバーを成す「オポヤズ」（「詩的言語研究会」）が提唱した研究方法「形式主義」によって巻き起こされた激しい論争の中から新たに現れた、同じアルヴァートフによる著書『社会学的詩学』（1928年）に載る「形式的社会学的方法」理論及びO. ブリークによって唱えられた「社会的注文」の概念であり、それらは「レフ」の後継である芸術家団体「10月」協会（1928年～1932年）の綱領のなかに現れている。クルーツィスはこの理論をその代表作であるポスター・シリーズ「5カ年計画のための闘い」のなかで具象を試みている。

本発表の目的は、20年代後半の中心的アヴァンギャルド芸術理論である「形式的社会学的方法」理論及び「社会的注文」に焦点を当て、それらを明らかにすることである。その上で今後の研究作業の予兆としてそれら理論をクルーツィスはいかに具象したかを、ポスター・シリーズ「5カ年計画のための闘い」の中の「メーデー、それは国際プロレタリア連帯の日である」（1930年）等において分析を試みることである。

（おおたけ ゆきこ、北海道大学）

【C09】ソ連非公式芸術における写真—ボリス・ミハイロフとコンセプチュアリズム

生熊 源一

本報告では、70-80 年代のソ連非公式芸術における写真の使用法に光を当てる。カメラの存在は、間違いなく非公式芸術の原動力のひとつであった。たとえばモスクワ・コンセプチュアリズムの代表的なグループである「集団行為」において、写真はパフォーマンスを記録する媒体としてだけでなく、それ自体芸術的効力を発する道具としてパフォーマンスの構造に組み込まれていた。こうしたパフォーマンスにおける写真は、いわゆる写真家が撮影する写真作品とは異なるように見える。実際、わたしたちがイリヤ・カバコフとボリス・ミハイロフという二人のソ連出身の芸術家の名前を思い浮かべる時、片方はモスクワ・コンセプチュアリズムを代表する現代アートの大雄として、もう片方はハッセルブラッド賞を受賞した写真界の巨匠として、それぞれ別の分野の代表者として想起されるのが通例だろう。そうしたジャンル分けは、この二人がソ連の一時代を生きた同時代人であり、もっと言えば直接に交流があった事実を忘れさせてしまう。

しかし後期ソ連の地下文化において、写真家と芸術家の距離はそう遠くなかった可能性がある。ミハイロフはカバコフらと非公式時代から交流があったが、それだけでなく、作風としてもアルバムなどの形式においてカバコフと近い関係にある。そこで本報告ではこの二人の接点を取り上げたうえで、コンセプチュアリズムの展開において写真が果たした役割を整理していく。具体的な論点としては、写真のファクトグラフィー的使用、光源とネガの問題、あるいは観察の身振りや身体との接点などを扱う。これらの議論を経ることで、世代とジャンルを超えた非公式文化のイメージへの取り組みが見えてくるはずである。

(いくま げんいち、北海道大学院生)

[P01] パネル ロシア語の名詞句をめぐって

[全体の要旨]

ロシア語の名詞句は単純化すれば：

- 1) [一致定語－主要部名詞－不一致定語]という形で、
 - 2) 一致定語は性、数、格、及び有生性で主要部名詞と一致し、
 - 3) 不一致定語は一致しない
- と言える。しかし、意味・用法は別にして形式面だけに目を向けたとしても、そこには様々に複雑な振る舞いがある。

そこで今回、ロシア語の名詞句に関するいくつかの形式面の問題を検討する。まず匹田は有生性の一致に関わる素性とメカニズムを検討し、後藤は性の対立が複数で消失するという従来の考え方では説明のつかない現象を指摘し、素性のコピーの方向及びその局所性について議論を展開する。さらに光井は性のうち特に男女の対立は離散的と言うより連続的な関係にあることを示し、宮内は出来事名詞に注目した上で、ロシア語の名詞句には上述の単純な理解では捉えきれない名詞の項の問題があることを示す。

〔司会〕阿出川修嘉

[全体の構成と各発表の要旨]

1. はじめに
2. 有生性の一致と文法素性 匹田剛
ロシア語で有生性は対格に生格形が用いられることによって標示され、一致定語もそれに併せて生格形をとる。そのことから、性、数、格の他に有生性についても一致が行われると考えられるわけだが、ときに主要部名詞と一致定語の示すパターンが異なったり、また様々な但し書きがないと正しく現象を予測できなかつたりなど、その詳細は複雑で、一つの規則にまとめて説明することは難しい。本発表では、有生性の標示と一致の引き金となる素性は「有生性、性、数」であるとする考え方、「有生性、数、屈折タイプ」であるとする考え方を見た上で、ロシア語の性と屈折タイプは複数においてはその対立を失う、としばしば論じられていることに着目し、ロシア語の有生性の生格形による標示は「有生性、性、屈折タイプ」が引き金となると考えることで、単一の規則によって現象が予測できることを示す。
3. 有生性および性に関する一致 後藤雄介
本発表では、有生性および性に関する一致について名詞の性の対立の観点から考察する。匹田は有生性に関する一致を詳細に検討し、名詞が複数形の場合、屈折タイプと性の対立が失われるという前提で、対格から生格への書き換え規則を提案している。一方、本発表では、名詞の性は単数形だけではなく、

複数形でも対立があると一致の観点から主張する。従って、匹田と後藤とでは性の対立に関する見解と説明出来る事例の範囲が異なる。そこで、匹田が提案する格の書き換え規則を修正し、名詞が複数形の場合、屈折タイプの対立が失われることを前提とし、対格から生格への書き換え規則に修正を加える。また、名詞の等位接続構造をケーススタディーとして、性・有生性・屈折タイプ素性のコピーが名詞句内のどの方向に対して行われるか、そしてそのコピーが名詞句内のどの範囲まで行われるかという点を検討する。

4. 性の連続体と文法素性 光井明日香

ロシア語には男性を指示する際には男性名詞として、女性を指示する際には女性名詞として振る舞う総性名詞や、女性を指示する際に定語や述語が意味的一致を行う、職業や社会的地位を示す男性名詞など、性の一致にバリエーションのある名詞が存在する。本発表では、性の一致にバリエーションのある名詞の振る舞いについて先行研究をまとめ、発表者の行ったアンケートの結果を記述的に考察し、性のうち特に男女の対立は離散的というよりも連続的な関係にあることを示す。また、このような名詞の振る舞いは、同じ第1変化の男性名詞でも、主格では意味的一致を行うが、主格以外では意味的一致を行わないなど複雑である。本発表では、D. Pesetsky が提案する女性化形態素 *Ж* を利用した上で、ある一定の素性がそろうと *Ж* が非活性化され、意味的一致が阻害されることを示す。

5. 出来事名詞とその項 宮内拓也

表面上は不一致定語と同じ形式であるものの、むしろ名詞の補語と呼ぶべきものも存在する。本発表ではいわゆる出来事名詞や行為名詞と呼ばれる名詞について、特に後続の項との関係を中心に言語事実を記述し、その振る舞いの複雑さの指摘と整理を試みる。まずは、後続する生格の項の意味役割に応じて出来事名詞には以下の3つのタイプがあることを指摘する：(a)後続の項が動作主のみ解釈されるもの、(b)動作主にも被動作主にも解釈されるもの、(c)被動作主のみ解釈されるもの。また、動作主の項が造格になることもあるが、この造格動作主項の出現には生格被動作主項の顕在化が必須であることを指摘する。これらのことは被動作主項として生格名詞句を取ることができないタイプの出来事名詞は造格の動作主項を取ることができないことを含意するが、その帰結が事実と矛盾しないことを示す。

6. まとめ

7. ディスカッション

【P02】パネル プラトーフ研究の現在：日本の視座から

〔全体の要旨〕

ロシア革命 100 周年の節目となる昨年、日本で刊行された出版物においてアンドレイ・プラトーフの名が言及された。例えば、北井聡子「世界変容・ドグマ・反セックス — 一九二〇年代ソビエトの性愛論争」(『現代思想』10月号、2017年)では1920年代のソ連で起こった性愛をめぐる論争に対してプラトーフが自作で示した批評的な言及が論じられた。またアルテミー・マグーン『コミュニズムにおける否定性 — 疎外のパラドクス』(八木君人訳、『ゲンロン 6』、2017年)では、現代ロシアにも存続する社会と個人の関係を原型的に示すものとして『土台穴』が分析された。

日本のプラトーフ研究とその紹介はこの半世紀のうちに厚みをましている。しかしその成果は、一般の読者むけのものとしては翻訳と作品解題が主であった。これらがプラトーフ研究の基盤形成のため今後も必要であることはいままでもないが、上記のような紹介によりプラトーフへの関心がさらに広がる可能性が感じられる。このワークショップはそのような関心に専門家が応えるための準備であり、同時に来年のプラトーフ生誕 120 周年に向けた予備的作業ともなる。

〔司会〕八木君人 (早稲田大学)

〔コメンテーター〕野中進 (埼玉大学)

〔報告者・要旨〕

長井淳 (津田塾大学) : 『ジャン』のテキストをめぐって

プラトーフにとって創作は自由な表現と自己検閲の間の葛藤であった。そして死後も、ペレストロイカ期に到るまでテキストに改竄が加えられ、中には作家の体制的な側面を隠蔽しようとするものもあった。プラトーフのテキストをめぐる諸問題は、今なお解決を要する課題であり、同時にそこには新たな読みの可能性も秘められている。ここでは、『ジャン』の創作の推移と出版された版の変遷を検証し、問題の一端を考察したい。

奈倉有里 (早稲田大学) : プラトーフ初期散文における詩的要素

プラトーフの初期散文作品(短編、論評等)における詩的要素(リズム、韻律、音韻的要素、抒情的定型表現等)にはいかなる特色があるのだろうか。またそれらは十九世紀の散文詩や雪解け期の抒情的散文と比較した場合、どういった類似点や差異があるのか。Э.А.バリプロフの抒情的散文研究、M.Л.ガスパロフの詩史研究、H.Л.レイデルマンのジャンル研究、E.トルスタヤのプラトーフ初期作品研究を足掛かりに、プラトーフ自身の詩との比較をふまえて検証していく。

佐藤貴之 (東京外国語大学) : プラトーフとピリニャーク — その師弟関係をめぐって

E.トルスタヤの論文「“スチヒーヤの力”：プラトーフとピリニャーク」(1978)は両作家の複雑な師弟関係を扱った先駆的研究である。トルスタヤによれば、活動初期のプラトーフはピリニャークの影響を受けつつ、その問題意識を超越していく形で発展を遂げていった。両作家はやがて「共作」の形で作品を発表したが、その作品は「反ソ的」として批判の対象となり、1930年代にプラトーフが執筆した戯曲にはピリニャークの姿がアイロニカルに描かれている。果たして両作家は師弟関係にあったのか、共作で発表された作品を中心に創作上の影響関係を分析する。

古川哲 (東京外国語大学) : プラトーフとドストエフスキーの比較を再考する

プラトーフとドストエフスキーとの対比は度々行われてきた。特にプラトーフの長編小説『チェヴェンゴール』と中編小説『土台穴』の研究に関して、ドストエフスキーを参照しながら論じる先行研究がすでに多数ある。本発表ではプラトーフとドストエフスキーの比較をめぐる議論を整理し、この比較が何を明らかにするのか検討し、その可能性について考察する。

【S01】 シンポジウム Л. Н. Толстой между Востоком и Западом: исследования, адаптации, перспективы

Данная секция обращается к творчеству Л. Н. Толстого с целью рассмотреть его из перспективы различных культурных традиций и выявить особенности его исследования на современном этапе. Секция состоит из двух частей. В первой части рассматривается специфика киноадаптаций произведений Толстого. Вторая часть посвящена анализу теоретических и биографических аспектов творчества Толстого и формирования его философских взглядов.

Первая часть: Произведения Л. Н. Толстого и их адаптация

Ведущая: Сильвия Какубари (Университет Сока)

Доклад 1: Проблема режиссерской интерпретации произведений Льва Толстого (на материале русских киноэкранизаций)

А. Э. Скворцов (Казанский университет)

Как известно, «перевод» литературного произведения на язык других видов искусства предполагает не только смену средств художественной изобразительности, но и «приращение смысла». В докладе рассматривается эволюция интерпретации произведений Л. Н. Толстого в русских киноэкранизациях на материале наиболее значительных кинолент 1960–2010-х годов («Война и мир» С. Ф. Бондарчука (1965-1967), «Крейцерова соната» М. А. Швейцера (1987), «Кавказский пленник» С. В. Бодрова (1996) и др.).

Доклад 2: Кинематографические адаптации Толстого: о фильмах Брессона и Куросавы

Акира Хасэгава (Университет Акита)

Знаменитые кинорежиссеры Робер Брессон (1901-1999) и Акира Куросава (1910-1998) с глубоким пониманием и любовью относились к русской литературе, особенно к Толстому и Достоевскому. Последнее произведение Брессона «Деньги» (1983) было снято по мотивам повести «Фальшивый купон» Толстого. А Куросава, вдохновленный повестью «Смерть Ивана Ильича», снял фильм «Жить» (1952). Настоящий доклад рассматривает средства изображения духовного пробуждения героев в фильмах двух режиссеров, применяя понятие экстаза Сергея Эйзенштейна.

Вторая часть: Теоретические и биографические аспекты

Ведущий: Томоюки Такахаси (Токийский университет)

Доклад 3: Исламский Восток в творчестве Л. Н. Толстого

Р. Ф. Мухаметшина (Казанский университет)

Особенности русской цивилизации, соединяющей в себе черты Запада и Востока, христианства и

ислама, нашли отражение в русской литературе и культуре. Диалог с Востоком привлекал внимание Л. Н. Толстого в аспекте формирования менталитета русского народа и как значимая составляющая российской истории. В докладе рассматриваются данные аспекты на примере повести «Хаджи Мурат» и малой прозы писателя. Особое внимание уделяется влиянию исламской традиции на формирование его философии.

Доклад 4: Казанские страницы жизни Льва Толстого в его художественных биографиях

Л. Х. Насрутдинова (Казанский университет)

Казанский период жизни Л. Н. Толстого традиционно принято рассматривать как исток его философских исканий и творческого пути. В выступлении анализируются принципы отбора биографического материала авторами около 10 биографий писателя, опубликованных с 1890-х по 2010-е годы, созданных российскими авторами и представителями русского зарубежья, ориентированных на взрослую и детскую читательскую аудиторию. Трактовка этого материала позволяет сделать вывод о понимании биографами сущности таланта писателя и мыслителя.

Доклад 5: Толстой для формалистов / Формалисты для Толстого

Наото Яги (Университет Васэда)

Среди работ двух членов так называемого «триумвирата ОПОЯЗа» – В. Шкловского и Б. Эйхенбаума – творчество Л. Толстого занимает особое место. Эйхенбаум в предисловии к «Молодому Толстому» видит в методе наблюдения и изображения Толстого аналогию с формальным анализом, а Шкловский в статье «Искусство как прием» объясняет понятие «остранение», приводя множество цитат из Толстого. При этом представляется, что формалисты уподобляются Толстому, а Толстой – формалистам. Цель данного доклада состоит в том, чтобы, разбирая тождество и различия между методами формалистов и Толстого, обнаружить особенности поэтики Толстого с точки зрения «видения», «движения», «времени» и т. д.

Секция проводится в сотрудничестве с Казанским федеральным университетом (Республика Татарстан, РФ). Участие исследователей из Казани осуществляется при поддержке Международного саммита языков и культур к 190-летию Льва Толстого, проходящего в рамках Года Льва Толстого в Казанском федеральном университете и Республике Татарстан

日本ロシア文学会活動記録 (2017~2018)

1. 2017年度(第67回)大会

第67回大会(定例総会・研究発表会)は2017年10月14日(土)、15日(日)の両日、上智大学で開催された。

10月14日(土)

午前 開会式、研究発表会

午後 理事会、研究発表会、大賞受賞記念講演、定例総会、懇親会

10月15日(日)

午前 研究発表会

午後 各種委員会、研究発表会

2. 研究発表会内容

研究発表

第1会場: 6号館202教室

10月14日(土)午前(ブロック①)

[司会] 郡伸哉、三好俊介

A01 杉野ゆり: プーシキン『青銅の騎士』と『漁師と魚の話』: 自伝的要素の問題に寄せて

A02 山下大吾: プーシキンの抒情詩「…再び私は訪れた」の一解釈

10月14日(土)午前(ブロック④)

[司会] 佐藤千登勢、長谷川章

A03 北井聡子: ファルスを持つ女—グラトコフ『セメント』のヒロイン・ダーシャについて

A04 古川哲: プラトノフ『手回しオルガン』におけるト書きの役割: 登場人物の移動に注目しつつ

A05 佐藤貴之: 革命後のロシア文学における「家」の表象

10月14日(土)午後(ブロック⑧)

[司会] 松本賢信、望月哲男

A08 泊野竜一: 『貧しき人々』における対話表現の問題

A09 上西恵子: 『罪と罰』における新しいエルサレム、神、ラザロの復活

A10 樋口稲子: ドストエフスキーの創作における特殊性

10月15日(日)午前(ブロック⑫)

[司会] 大西郁夫、乗松亨平

A13 山路明日太: レールモントフ『預言者』をめぐり—考察

A14 大野斉子: ソログープの作品における香りの表現

10月15日(日)午前(ブロック⑮)

[司会] 番場俊、宮川絹代

A16 平松潤奈: ドストエフスキーにおける貨幣

A17 塚田力: 『1890年チェーホフによるサハリン住民調査資料』における古儀式派住民と、チェーホフにおける古儀式派のイメージ

第2会場: 6号館306教室

10月14日(土)午前(ブロック⑤)

[司会] 黒岩幸子、小林潔

B01 光井明日香: ロシア語における男性・女性のペアを成す人間を表す名詞をめぐって

B02 金子百合子: ロシア語と日本語における「動作の限界」の語彙(語形成)的表現・文法的表現

B03 ЛАТЫШЕВА Светлана: Стихотворения как дидактический материал для постановки произношения и интонации у японских студентов

10月14日(土)午後(ブロック⑨)

[司会] 伊東一郎

P01 熊野谷葉子、藤原潤子、柚木かおり: ロシア・フオークロアの現在

10月15日(日)午前(ブロック⑬)

[司会] 中澤敦夫、三谷恵子

B04 丸山由紀子: パホーミイ・セルブ(ロゴフェート)直筆写本における言語的特徴に関して—『ラドネシのセルゲイ伝』を資料として

B05 青山忠申: 『アヴァクム自伝』におけるアクセント選択とその文体的役割について

10月15日(日)午前(ブロック⑯)

[司会] 浦井康男、堤正典

B06 渡部直也: 語の活用における出沒母音の交替の回避

B07 中野悠希: ロシア語におけるy+生格と状況語中のсвойとの照応条件について

B08 東出朋: ロシア語の呼びかけ語のボライトネス的用法

10月23日(日)午後(ブロック⑱)

[司会] МИТАНИ Кэйко

P02 МОЛДОВАН Александр, ХАТТОРИ Фумиаки, МИТАНИ Кэйко: Между источниками и списками: текстологические исследования средневековой славянской письменности

第3会場: 6号館305教室

10月14日(土)午前(ブロック②)

[司会] 藤原潤子、三浦清美

C01 宮崎衣澄: 大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスをめぐって

C02 渡辺圭: 現代ロシア正教会の靈的文獻

10月14日(土)午前(ブロック⑥)

[司会] 高橋健一郎、村田真一

C05 三浦領哉: В. Ф. Одо́ефска́я『ロシアの夜』と音楽思想

C06 一柳富美子: 知られざるチャイコフスキイ: 日記の未紹介ページから

C07 神竹喜重子: 19世紀末から20世紀初期のロシアにおける芸術メセナー古儀式派の資本家と私立歌劇場

10月14日(土)午後(ブロック⑩)

[司会] 楯岡求美、本田晃子

C08 江村公: メディエーターとしてのニコライ・ブーニン—十月革命後の芸術組織再編の中で

C09 伊藤愉: ロシア国立芸術史研究所の活動と1920年代演劇

C10 鈴木佑也: ソ連建築界と近代主義建築における都市像の軋み: 第四回近代主義建築国際会議(CIAM)モスクワ開催の頓挫理由究明に向けて

10月15日(日)午前(ブロック⑭)

[司会] 熊野谷葉子、毛利公美

A15 南平かおり: 1950年代の日本児童文学界におけるロシア翻訳児童文学—ノーソフ作福井研介訳『ウィーチャと学校友だち』を中心に

C11 恩田義徳: 聖アトス山ゾグラフィオス修道院文書庫の露和辞典について

10月15日(日)午前(ブロック⑰)

[司会] 貝澤哉、佐藤正則

C12 林由貴: 在外ロシア思想における経験の概念(ゲッセンとグールヴィチ)

C13 前田しほ: 旧ソ連の記念碑における寓意的女性

像：ロシア・南コーカサス・ウクライナの現状と
比較考察

10月15日(日)午後(ブロック⑬)

〔司会〕 КОМИЯ Митико

P03 КОВТУН Наталья, НОНАКА Сусуму, ГРЕЧКО
Валерий, КИМ СуКван : Революционный импульс:
искусство, наука, идеология

第4会場：6号館303教室

10月14日(土)午前(ブロック⑬)

〔司会〕 岩本和久、武田昭文

C03 БОБОРЫКИНА Татьяна : В поиске визуальной
метафоры: Достоевский на языке балета и кино

C04 БЛИНОВ Евгений : Виктор Виноградов об
историчности «национализма» Пушкина в
контексте новой культурной политики тридцатых
годов

10月14日(土)午前(ブロック⑭)

〔司会〕 鴻野わか菜、越野剛

A06 КОЛЕСНИКОВА Елена : Александр Блок и
медиа среда начала XX в. (по архивным
материалам Пушкинского Дома РАН)

A07 КОВТУН Наталья : Современный русский
традиционализм: идеология, эстетика,
перспективы

10月14日(土)午後(ブロック⑮)

〔司会〕 奈倉有里、前田和泉

A12 ФЕДОСЕЕВА Татьяна : Онтология личности в
лирике Я. П. Полонского

第4回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月15日(土)15:20-16:20 6号館304教室

桑野隆：20世紀ロシアの人文知の魅力

3. 総会議事録要旨

10月15日(土)15:20-16:20 6号館304教室

(1) 開会の辞 会長：望月哲男(敬称略、以下同様)

望月哲男会長が開会の辞を述べた。

(2) 学会賞表彰 【論文部門】高橋知之・伊藤愉

大石雅彦学会賞選考委員長が選考結果の報告を行い、望
月会長から高橋知之・伊藤愉氏に表彰状と副賞が手渡され
た。

(3) 議長団選出

該当支部からの推薦に基づき、安達大輔(関東)・平松
潤奈(中部)・ヨコタ村上孝之(関西)が議長候補として
示され、全会一致で承認された。

(4) 会長選 選挙管理委員会

恩田義徳選挙管理委員長より郵便投票(第一次投票)の
結果報告が行われた。総投票数91、有効投票数87であっ
た。三位までの上位得票者が五十音順に示された(同票者
があったため四名)：桑野隆、中村唯史、沼野充義、三谷
恵子

引き続き第二次投票を行ったが、投票者の過半数を得た
候補者がおらず、上位二名(中村唯史、三谷恵子)で決選
投票を行った。三谷氏が多数得票者となり、会長として選
出された。

三谷氏は会長職受諾の挨拶を行った。

(5) 事務局報告

(6) 各種委員会報告

(7) 他の学会活動報告

・シンポジウム「ロシアの文化 その魅力と鑑賞法」(2017
年7月8日、於東京大学)について三谷会長から報告があ
った。

・ロシア文学大事典 WG について中村副会長から報告が
あった。

(8) 2016/2017年度決算および会計監査報告

事務局より前年度決算報告が行われ、諫早勇一監事より
会計監査報告が行われた。

(9) 2017/2018年度予算案について

新年度の予算案が示され、全会一致で承認された。

(10) 2018年度大会について

2018年の全国大会会場として、望月会長より名古屋外
国語大学が提案され、全会一致で承認された。

(11) 新役員および新委員について

望月会長より新役員・委員の案が示され、全会一致で承
認された。

(12) 閉会の辞

議員団が解任され、望月会長の退任のあいさつの後、中
村唯史副会長が閉会の辞を述べ、閉会となった。

4. 会員異動(2017年10月～2018年7月)並びに賛助会 費・維持会費納入者(敬称略)

入会者

石井優貴(関東)、占部歩(関西)、小川佐和子(関西)、
山本明尚(関東)
現代思潮新社(賛助会員)

退会者

シヴァコーワ、ステラ(関東)、ジダーノフ、ウラジーミ
ル(北海道)、松本賢一(関西)、柳沢民雄(中部)

賛助会費納入者

国際親善交流センター(JIC)、新潮社、成文社、ナウカ・
ジャパン、ナウカ出版、日ソ、日本ロシア語情報図書館、
白水社、ロシア旅行社

維持会費納入者

井桁貞義、岩浅武久、宇多文雄、木村崇、栗原成郎、坂庭
淳史、佐藤純一(2口)、佐藤靖彦、澤田和彦、鈴木淳一、
相馬守胤、長野俊一、中村泰朗、沼野充義、野中進、服部
文昭、法橋和彦、前田和泉(2口)、村井隆之、望月恒子
(2口)、望月哲男(20口)、諸星和夫、山田吉二郎、米川
哲夫(2口)

日本ロシア文学会

2016/2017 会計年度決算報告 (2016 年 9 月 1 日～2017 年 8 月 31 日)

2017/2018 会計年度予算案 (2017 年 9 月 1 日～2018 年 8 月 31 日)

(2017 年 10 月 14 日総会承認)

I 一般会計

収入の部	2016/2017 年度予算	2016/2017 年度決算	2017/2018 年度予算	備考
前年度からの繰越金	3,788,794	3,788,794	3,200,105	
利息	200	4	5	
学会費	2,500,000	2,537,507	2,500,000	
入会金	5,000	5,000	5,000	
賛助会費	70,000	100,000	100,000	
雑収入	0	64,000	0	
特別収入	0	20,000	0	
合計	6,363,994	6,515,305	5,805,110	
支出の部	2016/2017 年度予算	2016/2017 年度決算	2017/2018 年度予算	備考
大会準備費	400,000	435,778	600,000	
学会誌制作費	798,012	836,090	800,000	
交通費	1,000,000	948,770	1,000,000	
事務委託料	300,000	313,540	300,000	
事務費	80,000	94,980	80,000	
広報委員会	15,428	15,428	15,428	
マブリヤール会費	25,000	23,692	25,000	
JCREES 会費	30,000	30,000	30,000	
学会賞	100,000	100,000	100,000	
通信費	200,000	162,998	200,000	
印刷費	150,000	138,952	150,000	
会合費	10,000	972	10,000	
事業費	50,000	30,000	50,000	
特別会計に振替	0	184,000	0	
(小計)	3,158,440	3,315,200	3,360,428	
予備費	3,205,554	0	2,444,682	
次年度への繰越金	0	3,200,105	0	
合計	6,363,994	6,515,305	5,805,110	

II 特別会計

収入の部	2016/2017 年度予算	2016/2017 年度決算	2017/2018 年度予算	備考
振替 (一般会計)	0	184,000	0	
前年度からの繰越金	2,946,123	2,946,123	2,756,148	
維持会費	150,000	200,000	200,000	
利息	600	25	25	
合計	3,096,723	3,330,148	2,956,173	
支出の部	2016/2017 年度予算	2016/2017 年度決算	2017/2018 年度予算	備考
学会費補助	40,000	0	40,000	
事業費	200,000	194,000	200,000	
学会参加者旅費援助	200,000	380,000	180,000	
(小計)	440,000	574,000	420,000	
予備費	2,656,723	0	2,536,173	
次年度への繰越金	0	2,756,148	0	
合計	3,096,723	3,330,148	2,956,173	

(2017 年 10 月 6 日、13 日監査報告)

監事：諫早勇一、寒河江光徳)

委員会活動記録

■日本ロシア文学会大賞選考委員会

諫早 勇一

本年度は、昨年 12 月末時点で 5 件の推薦があり（うち 1 件は前年度からの継続推薦）、その審議のために、4 月 14 日に東京大学で選考委員会を開催した。審議の末、大賞候補者として澤田和彦氏（現在は埼玉大学名誉教授）を推薦することが決定され、この結果は 7 月 22 日の理事会で正式に承認された。

授賞の主な理由は、(1) ゴンチャロフ研究における多大な貢献：澤田氏は刊行中のアカデミー版ゴンチャロフ全集で編集者の一人に加わっておられるほか、2017 年には国際ゴンチャロフ学会において国際文学賞(研究者部門)を受賞されている、(2) 日露交流史研究における優れた業績：澤田氏は『白系ロシア人と日本文化』(2007 年)、『日露交流都市物語』(2014) などの優れた著書を著され、白系ロシア人が日本文化・社会にもたらした影響や、日露文化交流の実態について先駆的な業績を残されたことだが、このほかいくつかの学会・大学で後進の育成に当たられて来られたことも忘れられない。

なお、選考結果報告の全文は、『ロシア語ロシア文学研究』50 号に掲載されている。

■学会賞選考委員会

井上 幸義

学会賞選考委員会は 2018 年 1 月から 6 月にかけて選考作業を行った。6 月 2 日に選考委員会が開催され、審査・選考の結果、生熊源一「息の転換—「集団行為」における対物関係—」(『ロシア語ロシア文学研究』第 49 号掲載) が受賞作に決定した。著書については、該当作なしという結論になった。詳しくは『ロシア語ロシア文学研究』第 50 号をご参照ください。

■学会誌編集委員会

大平 陽一

この報告をお読みになる頃には会誌 50 号がお手許に届いているかと思います。この場を借りて、査読にあたって下さった会員諸氏、書評、学会動静をご寄稿賜りました先生がたに篤く御礼申し上げます。

しかし、論文を投稿してくれた皆さまに、誰よりも深く感謝申し上げます。第 51 号への投稿エントリーも例年通り、11 月末日です。力作をお待ちしております。

■広報委員会

古賀 義顕

広報委員会では引き続き学会ホームページ (HP) の管理・運営を行ない、学会員への情報提供に努めている。直近 1 年間の更新件数は 146 件 (バナー掲示 [54]、学会からのお知らせ [66]、学会関連その他の催し (カレンダー) [11]、ロシア関連一般書籍 [15])。今後も会員各位に情報提供を継続的に呼びかけていく。

■国際交流委員会

楯岡 求美

1. 2018 年 5 月 30 日を締切として、「国際学会等での報告に関する助成」と「公開研究会・(ミニ) シンポジウム等の実施に関する助成」の申請を募集し、委員会の審議を経て、前者 5 件、後者 0 件を理事会で採択した。助成該当者による国際学会の報告・印象記は、学会ホームページに掲

載予定。なお、来年度も本制度への助成金として予算 20 万円が理事会にて承認された。ただし、理事会では助成金の受給限度額等を明確化すべき時期に来ている、との指摘があり、今後国際交流委員会で検討することとなった。

2. 2015 年度全国大会で試行され、2016 年度全国大会より正式に採用された「国際参加枠」を今年度も継続。2018 年度全国大会には 4 名のエントリーがあり、理事会での審議の結果、4 名全員が承認された。

3. カザン大学から、日本ロシア文学会に宛てて、全国大会の枠内でトルストイ生誕 190 年を記念する共同シンポジウムを開催するという申し入れがあり、それを受けて、国際枠以外に国外の研究・教育機関の報告者を受け入れ、合同で初日午前中に実施することになった。テーマは「Л. Н. Толстой между Востоком и Западом: исследования, адаптации, перспективы」、パネリストはカザン大学から 3 名、日本側から 2 名が参加、司会 2 名は日本側が務める。カザン大学からは今後日本との研究・教育交流を進める目的でロシア語教育研究者も 1 名同行する。

4. 海外で開かれる国際会議・シンポジウム・セミナー等の情報を、広報委員会の協力を得ながら、学会ホームページに随時掲載している。引き続き学会員には、定期的に学会ホームページを閲覧されるとともに、国際会議などの情報があれば、国際交流委員会もしくは広報委員会までお知らせ願いたい。

■ロシア語教育委員会

熊野谷 葉子

10 月 14 日の第 1 回委員会で取り決めた活動方針①国内外のロシア語教育に関する催しを会員にお知らせする、②国内外のロシア語教育に関する研究や会議に参加、共催する、③ロシア文学会内でのロシア語教育に関する活動に協力する、に基づき、ロシア文学会のメーリングリストで各種催しのお知らせをし、2017 年 12 月 9 日 (土)、10 日 (日) に大阪大学豊中キャンパスで開催されたロシア語教育研究集会を委員会として共催しました。今後も国内外のロシア語教育関連の情報を提供し、共催や後援の要請があれば検討し取り組んでいきます。

支部活動記録

■北海道支部

2018 (平成 30) 年度日本ロシア文学会北海道支部支部会 (運営委員会、研究発表会、総会) : 2018 年 7 月 14 日 北海道大学、人文・社会科学総合教育研究棟 W308 号室
◇運営委員会: 平成 29 年度活動報告、会計報告、その他。
◇研究発表会

植木健二 (北大院) 「ゴーゴリの戯曲と古典主義演劇の関係—『結婚』を中心に—」 司会: 越野剛

清沢紫織 (スラブ・ユーラシア研究センター) 「現代ベラルーシ語におけるタラシケヴィツァとは何か: その成立過程と現状」 司会: 鈴木理奈

安達大輔 (スラブ・ユーラシア研究センター) 「ゴーゴリにおける反省について」 司会: 大西郁夫

寺田吉孝 (北海学園大学) 「M.M. ドブトウヴォールスキとその『アイヌ語・ロシア語辞典』について」 司会: 岩原宏子

◇総会

1. 平成 29 年度活動報告 (理事会および北海道支部)

- 2.平成29年度会計報告
- 3.その他

支部長：寺田吉孝
事務局担当：大西郁夫
住所：060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学文学研究科 大西研究室気付
Tel:011-706-4090 Mail:ions@let.hokudai.ac.jp

■東北支部

2018年度研究発表会
2018年7月14日(土) 秋田大学
研究発表会
長谷川章 アレクセイ・フェドルチェンコの映像世界—いま・ここで他者と対峙し映画を撮るということ
柳田賢二 ロシア人にとってパラドキシカルな日本語なまり—日本語のモーラ言語性と母音無声化および前舌子音音素の少なさの干渉について

支部長：長谷川章
事務局担当：川辺博
住所：〒981-3213 仙台市泉区南中山 5-5-2
聖和学園短期大学 川辺研究室気付
電話 022-376-8270 (川辺直通)
ファクス 022-376-3155 (共用)
E-mail kawabe@seiwa.ac.jp

■関東支部

1. 『関東支部報』36号発行
2018年5月15日
2. 2018年度研究発表会
2018年6月2日(土) 早稲田大学戸山キャンパス36号館681教室
◇研究発表
井伊裕子(東外大院)「サヴラソフの広野モチーフの位置付け：「月夜。沼」 「沼の日没」を中心に」(司会：河村彩)
大内悠(東外大修士課程修了)「ソヴィエト・ウズベキスタンにおけるイーゼル絵画芸術の形成と展開—1920-30年代を中心に—」(司会：河村彩)
櫻間瑞希(筑波大院)「タートル・ディアスポラにおける民族語継承：アスタナのタタール人の言語選択に焦点を当てて」(司会：朝妻恵理子)
清沢紫織(筑波大博士課程修了)「ベラルーシ共和国における国家語政策：地位計画、実体計画、普及計画の観点から」(司会：朝妻恵理子)
菅井健太(東外大博士課程修了)「ブルガリア語方言における対格標識 ПЪ をめぐって」(司会：堤正典)
北井聡子(東大博士課程修了)「ネップ期ソ連における集団主義と性」(司会：高柳聡子)
小澤裕之(東大博士課程修了)「ダニイル・ハルムスの手法と詩学」(司会：野中進)
古宮路子(東大博士課程修了)「「弱さ」と「反社会性」の行く先—オレーシャ『羨望』におけるヒロイン像の生成」(司会：佐藤千登勢)
高橋知之(東大博士課程修了)「「驚くべき十年間」再考—1840年代のロシア文学における「反省」と「直接性」の問題」(司会：粕谷典子)
3. 運営委員会
2017年3月31日(土)に早稲田大学(戸山キャンパス)

にて開催し、今期の支部運営体制や研究発表会等について検討した。

4. 2018年度第1回総会

2018年6月2日(土) 早稲田大学(2018年度日本ロシア文学会関東支部研究発表会の会場で開催)：

- ① 報告事項 2017.4.1-2018.3.30 会計報告、活動報告
- ② 審議事項 特になし

5. 今期の体制

支部長 伊東一郎
事務局長 乗松亨平
事務局住所 〒153-8902 目黒区駒場3-8-1
東京大学駒場キャンパス18号館 乗松亨平研究室
(knorimatsu@nifty.com)

■中部支部

2017年8月～2018年7月の間は活動なし。

支部長・事務局長：杉本一直
事務局住所：〒464-8671 名古屋市中種区桜が丘23
愛知淑徳大学 交流文化学部 大学院GCC研究科
杉本一直研究室気付

■関西支部

1. 秋季研究発表会・総会
2017年12月2日(土) 大阪大学(言語文化研究科)
◇研究発表
和田芳英「なぜ昇曙夢の仕事が隠蔽されてきたか」(司会：ヨコタ村上孝之)
岡野要「ヴォイヴォディナ・ルシン語の無人称述語 НЕТ を含む構文について」(司会：岡本崇男)
パネル発表：『ロシアの物語空間』をめぐる「退屈な話」
発言者：角伸明、榎本真奈美、近藤昌夫(司会兼任)、高田映介
◇総会
①会員の異動 ②理事会報告 ③決算報告と予算案の承認 ④運営委員の承認 ⑤次期開催校
2. 『関西支部会報』2017/2018年度 第1号発行
2018年1月25日
3. 春季研究発表会・総会
2018年6月9日(土) 神戸市看護大学
◇研究発表
中野悠希「ロシア語とポーランド語の前置詞句 y/u+生格の非規範的主語構文について」(司会：岡本崇男)
岡野要「スロヴァキア語における水中・水上の移動を表す動詞の意味と分布について—ロシア語およびほかのスラヴ諸語と対照して—」(司会：田中大)
山本法子「オペラ『太陽の征服』におけるコンテクスト性とパフォーマンスティヴィティ」(司会：本田晃子)
占部歩「ペレーヴィンとロプ＝グリエ—推理小説のパロディという遊び—」(司会：中村唯史)
◇総会
①会員の異動 ②関西支部役員選任規定の改正 ③理事会報告 ④次期開催校
4. 『関西支部会報』2017/2018年度 第2号発行
2018年7月31日

2018年10月以降の支部長名・支部事務局連絡先
支部長：中村唯史
事務局：服部文昭
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学総合人間学部 服部研究室気付

hattori.fumiaki.4x@kyoto-u.ac.jp

■西日本支部

2018 年度総会

2018 年 6 月 16 日 於九州大学博多駅オフィス

◇研究発表

佐藤正則 ポスト・ヒューマン思想の起点としてのロシア
革命：ボグダーノフのテクトロギヤ

太田丈太郎 ニコライ・ハールジェフ (1903-1996) のワ
ルワラ・ブブノワ (1886 -1983) 宛書簡原本について

支部長 西野常夫

事務局長 西野常夫

事務局住所 819-0395 福岡市西区元岡 744

九州大学大学院比較社会文化研究院 西野常夫研究室気
付

日本ロシア文学会 第 68 回大会資料集
2018 年 9 月 25 日発行
発行者 日本ロシア文学会 三谷恵子
〒338-0825 埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学人文社会科学研究科野中進研究室内
日本ロシア文学会事務局

E-mail: yaar@yaar.jpn.org

URL: <http://yaar.jpn.org/>

現在の生のロシア語を映し出す

ロシア語日常会話表現詳解辞典 全2巻

Толковый словарь русской разговорно-обиходной речи. В 2 т.

Химик В.В. СПб., <Златоуст>. 2017. 1060 頁
¥24,732

アカデミー版 ロシア語詳解辞典 全12~15巻

Академический толковый словарь русского языка

Ин-т рус.яз.им.Виноградова РАН. М. <ЯСК>
Т.1.А-Вилять. 2017. 672 頁 ¥11,340
Т.2. Вина-Гяур. 2017. 680 頁 ¥11,340

聖書スタディ版(聖書注解)

Библия. Учебное издание.

М., РБО. 2017. 2640 с. ¥16,740

ロシアでは 100 年ぶりの本格的な注解書。現代ロシア語訳。

マンデリシュタム作品・書簡全集 全3巻

Мандельштам О.Э.- Полное собрание сочинений и писем. В 3 т.

СПб., <Гиперион>. 2017. 2200 頁 ¥15,768

ストルガツキー兄弟全集 全33巻

Стругацкий А.Н. и Б.Н. – Полное собрание сочинений. В 33 т.

СПб., <Сидорович А.В.>. 2017-2018. 各巻 ¥15,984

ロシア・ソ連のアニメ映画の歴史 20世紀

История мультипликации. XX век

Горшкова Д. М., <Варио>. 2016. 528 с.

¥38,016

ブックショップ ナウカ・ジャパン

10:00-19:00 (日曜・祝日休み)、学生割引あり
最寄駅 東京・メトロ神保町、JR 御茶ノ水

ナウカ・ジャパン

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-34

TEL 03-3219-0155, FAX 03-3219-0158

book@naukajapan.jp http://www.naukajapan.jp

◆新和露・露和辞典 10万語 Новый японско-русский и русско-японский словарь : 100 000 слов, словосочетаний. Составитель В. И. Коложная. М.: Дом Славянской книги, 2017. 830 с. Q4331 税込 ¥3,888

◆ショーロホフ: 学術版 静かなドン 全2巻 Шолохов М.А. - Тихий Дон. Научное издание. В 2 томах. М.: ИМЛИ РАН, 2018. 1680 с. Q4339 税込 ¥14,040

◆チェルヌイシヨウヴァ=メーリニク: セルゲイ・ディアギレフ 編集者・時評家・批評家 Чернышова-Мельник Н. Д. - Сергей Дягилев - редактор, публицист и критик. СПб.: Алетея, 2018. 464 с. Q4355 税込 ¥5,940

◆ホルモゴロフ: 映画の真理 保守映画批評家の試論 Холмогоров Е. С. - Истина в кино: Опыт консервативной кинокритики. От "Викинга" и "Матильды" до "Игры престолов" и "Карточного домика". М.: Книжный мир, 2018. 640 с. Q4399 税込 ¥5,940

◆ヨシフ・プロツキー: 詩集(全2巻)|詩集「荒野の停車場」「美しい世紀の終焉」「品詞」「アウグスタへの新スタンザ」「ウラニヤ」「洪水の風景」/訳詩集|レフ・ローゼフ解説・注解 Бродский И. А. - Стихотворения и поэмы: В 2 томах. СПб.: Лениздат; Книжная лаборатория, 2017. 1408 с. Q4451 税込 ¥16,200

◆マクシム・グレーエフ: ヨシフ・プロツキー 二つの島の間 生きること Гуреев М. - Иосиф Бродский. Жизнь между двумя островами. (Серия: Эпоха великих людей). М.: АСТ, 2017. 448 с. Q4461 税込 ¥4,212

◆アナトリー・ナイマン: アンナ・アフマートヴァ 我々が生まれんと思いついた時 Найман А. - Анна Ахматова. Когда мы вздумали родиться. (Серия: Эпоха великих людей). М.: АСТ, 2018. 320 с. Q4462 税込 ¥3,456

◆ハングル=ロシア語学習辞典 Корейско-русский учебный словарь иероглифов. Отв. ред. И.Л. Касаткина, Чон Ин Сун ; Ин-т стран Азии и Африки МГУ им. М.В. Ломоносова. М.: Восточная литература, 2018. 511 с. Q4470 価格未定

◆マクシム・クロンガウス他: 教科書でないロシア語教科書 正書法全2冊 |第一部: 語根についてなど/第二部: 接頭辞・接尾辞・語尾についてなど|М. Кронгауз, Арутюнова Е., Панов Б. - Неучебник по русскому языку: Орфография: В 2 частях. / Ч.1: О корнях и не только; Ч.2: О приставках, суффиксах, окончаниях и не только. М.: Клевер-Медиа-Групп, 2018. 285 с. Q4481 税込 ¥4,428

◆トロフィメンコフ: 20世紀映画の運命 場面と死体 Трофименков М. - XX век представляет. Кадры и кадавры. М.: Флюид ФриФлай, 2018. 416 с. Q4498 税込 ¥4,320

◆カルガシン: 17 - 21世紀ロシア詩の連句 Каргашин И. - Русский стихотворный сказ XVII - XXI вв. Генезис. Эволюция. Поэтика. (Серия: Studia philologica). М.: Языки славянских культур, 2017. 336 с. Q4500 税込 ¥4,212

◆ヴラーソヴァ: ロシアの迷信 Власова М. - Русские суеверия. СПб.: М.: Азбука, 2018. 736 с. Q4521 税込 ¥5,940

◆日本語 易しいイラスト入り独習書 Японский язык. Популярный иллюстрированный самоучитель. М.: АСТ, 2018. 128 с. Q4298 税込 ¥2,592

◆同時代人の見たマヤコフスキー 国立マヤコフスキー博物館所蔵資料カタログ Маяковский глазами современников. Каталог материалов из фондов Государственного музея В. В. Маяковского. М.: Государственный музей В. В. Маяковского, 2018. 600 с. Q4329 税込 ¥14,040

◆レオニート・アロンゾーン: 作品集 全2巻 Аронзон Л. - Собрание сочинений. В 2-х тт. СПб.: Издательство Ивана Лимбаха, 2018. 920 с. Q4334 税込 ¥6,480

日ソのホームページ (http://www.nisso.net) ではロシアの新刊書、新聞・雑誌、美術アルバムのコーナーの他に、約80,000点以上ロシア書籍のキーワード検索が可能です

(株)日ソ

東京・大阪・モスクワ

ソ

Tel.03-3811-6481
Fax03-3811-5160
nisso@nisso.net